佐久市埋蔵文化財調査報告書　第41集

曽根新城遺跡 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ

上久保田向遺跡 Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ

西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ

長野県佐久市長土呂曽根新城遺跡Ⅰ地区他
区画整理事業の道路建設工事等に伴う発掘調査報告書

1995. 3

佐　　久　　市
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第41集

曽根新城遺跡 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
上久保田向遺跡 Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ

長野県佐久市長土呂曽根新城遺跡Ⅰ地区他
区画整理事業の道路建設工事等に伴う発掘調査報告書

1995. 3

佐　　久　　市
佐久市教育委員会

遺跡付近より浅間山を望む

曽根新城・上久保田向遺跡の区画整理事業前の航空写真。

曽根新城(上)上久保田向(下)遺跡遠景

上久保田向遺跡Ⅴ地区　H38号住居址

上久保田向遺跡Ⅴ地区　H38号住居址掘り方

例　　言

1、本書は平成元年8月から平成7年3月まで行った、佐久市区画整理課による佐久市都市計画岩村田北部第一土地区画整理事業の道路建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、発掘調査は佐久市教育委員会埋蔵文化財課が担当した。

3、本書は林　幸彦、須藤隆司の指導の下で森泉かよ子が編集・執筆した。
石製品については須藤隆司、鉄製品については上原　学が編集・執筆している。

4、本遺跡の出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1、遺構の略称は次のとおりである。
H－竪穴住居址　F－掘立柱建物址　D－土坑・土壙墓　M－溝址　P－ピット

2、挿図の縮尺は次のとおりである。
住居址実測図－1／80、カマド実測図－1／40、遺物1／4を基本とし、異なる場合は図に明記してある。

3、挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを表す。
遺構　地山断面－斜線　　焼土－砂目　　柱痕－砂目極細　　粘土－点
遺物　土器器面の黒色処理－点　　須恵器断面－黒色　　灰釉陶器－砂目極細

4、遺構図の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

5、土層・土器の色調は、1988年『新版標準土色帖』に基づいて示した。

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯
第1節　発掘調査に至る動機……1
第2節　調査の概要……2
第3節　調査組織……14
第4節　調査日誌……17
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
第1節　自然環境……23
第2節　周辺遺跡……25
第3節　基本層序……27
第Ⅲ章　曽根新城遺跡の遺構と遺物
第1節　曽根新城遺跡Ⅰ地区……32
1、竪穴住居址……33
2、掘立柱建物址……72
3、土坑……74
4、ピット……75
5、溝状遺構……76
第2節　曽根新城遺跡Ⅱ地区……77
1、竪穴住居址……78
2、土坑……81
3、溝状遺構……82
第3節　曽根新城遺跡Ⅲ地区……83
1、竪穴住居址……84
2、掘立柱建物址……95
3、土坑……96
4、溝状遺構……102
第4節　曽根新城遺跡Ⅳ地区……104
1、掘立柱建物址……105
2、ピット……107
第5節　曽根新城遺跡Ⅵ地区……108
1、竪穴住居址……109
2、土坑……121
3、ピット……125
4、溝状遺構……126
第6節　曽根新城遺跡Ⅰ……131

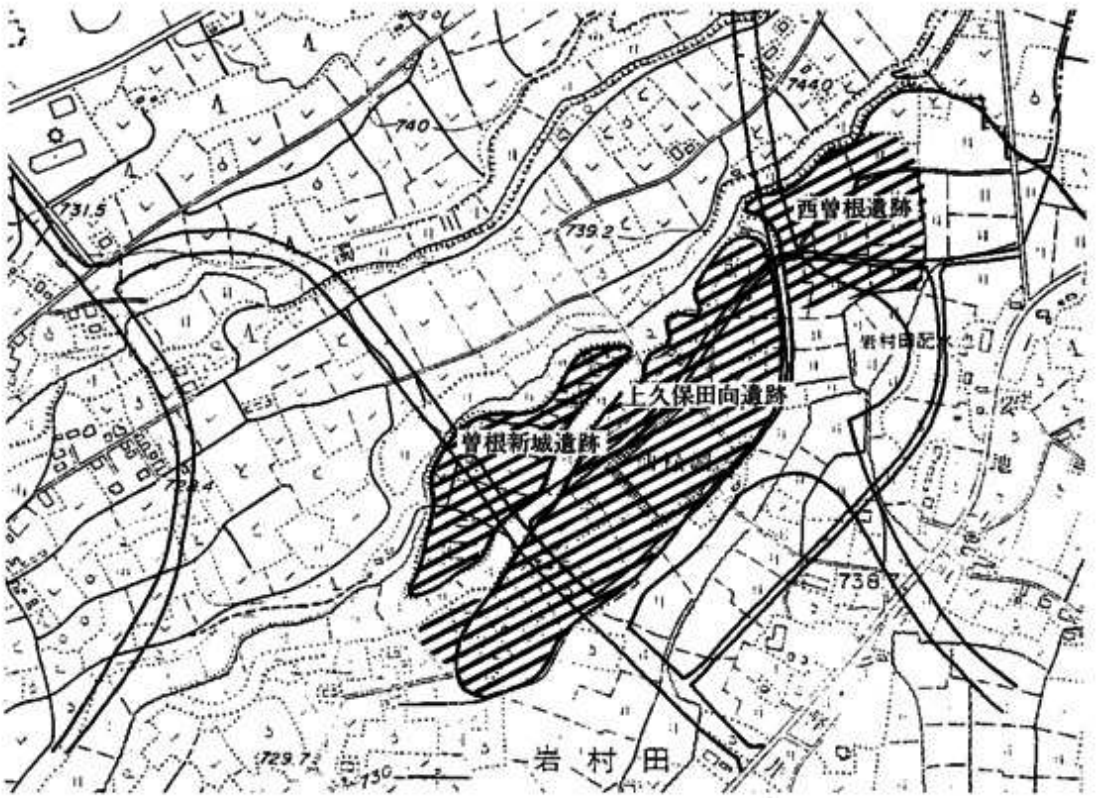
第Ⅳ章　上久保田向遺跡の遺構と遺物
第１節　上久保田向遺跡Ⅰ地区 …… 134
１、竪穴住居址 …… 135
２、掘立柱建物址 …… 170
３、土坑 …… 181
４、溝状遺構 …… 182
第２節　上久保田向遺跡Ⅱ地区 …… 185
１、竪穴住居址 …… 186
２、掘立柱建物址 …… 199
３、土坑・土壙墓 …… 206
４、溝状遺構 …… 210
５、ピット …… 213
６、焼土跡 …… 213
７、河川 …… 215
第３節　上久保田向遺跡Ⅴ地区 …… 216
１、竪穴住居址 …… 217
２、掘立柱建物址 …… 240
第４節　上久保田向遺跡Ⅵ地区 …… 245
１、河川 …… 246
第５節　上久保田向遺跡Ⅶ地区 …… 248
１、竪穴住居址 …… 249
２、溝状遺構 …… 256
第６節　上久保田向１ …… 258
第７節　上久保田向４・５ …… 259
第Ⅴ章　西曽根遺跡の遺構と遺物
第１節　西曽根遺跡Ⅱ地区 …… 262
１、掘立柱建物址 …… 263
第２節　西曽根遺跡Ⅲ地区 …… 264
１、掘立柱建物址 …… 265
２、土坑 …… 274
第Ⅵ章　その他
第１節　石製品 …… 274
第２節　鉄製品 …… 275
第Ⅶ章　まとめ …… 280
引用参考文献

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る動機

曽根新城遺跡・上久保田向遺跡・西曽根遺跡は佐久市の北部にあり、浅間山南麓の末端部にあたる。南西方向に延びる田切り地形が発達している所にある。田切りを挟んで、北の狭い台地が曽根新城遺跡、南の台地が上久保田向遺跡で、隣り合う遺跡である。標高734～741mを測る。また西曽根遺跡は曽根新城遺跡の低地を挟んだ北の台地上にあり標高744～746mを測る台地である。

今回、佐久都市計画事業岩村田北部第一土地区画整理事業として市街地の形成を図るため、道路建設がなされることとなった。すでに周辺地域の聖原遺跡等で大集落の存在が確認されており、本地区も試掘調査をしたところ遺構が検出され本調査が必要となった。そこで佐久市区画整理課より委託された佐久市教育委員会埋蔵文化財課が発掘調査を担当することとなった。

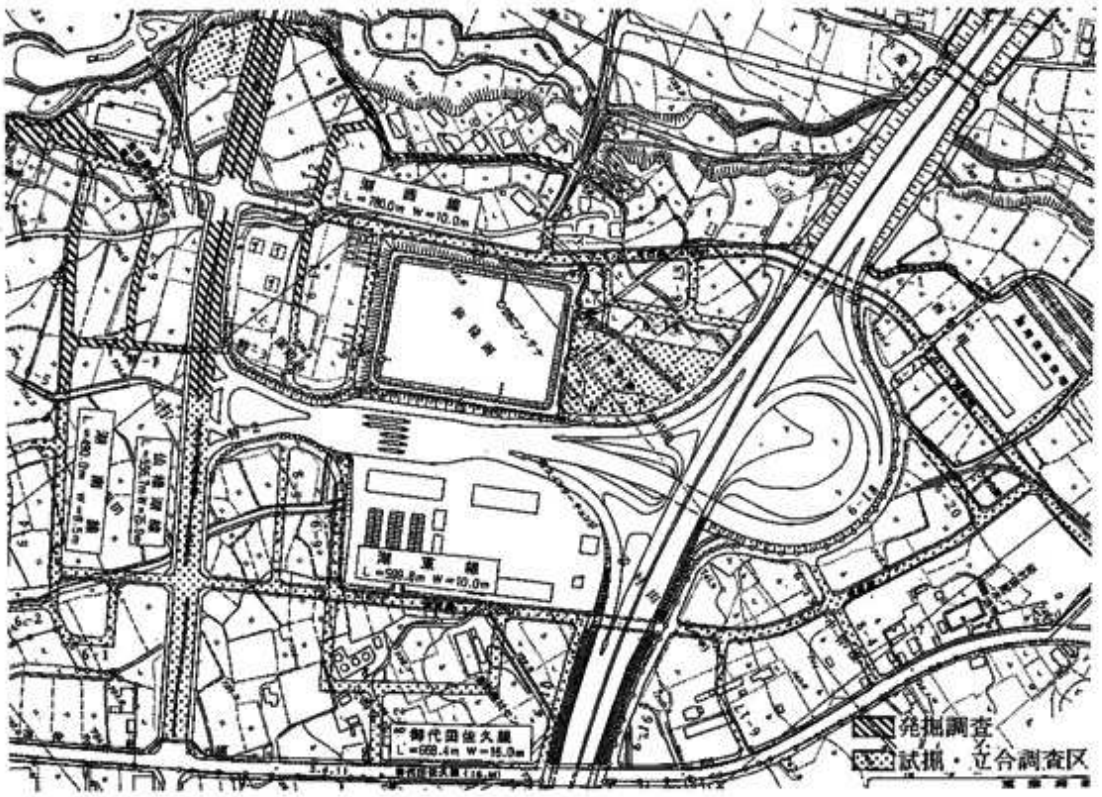


第1図　曽根新城・上久保田向・西曽根遺跡位置図（1：1,000）

第２節　調査の概要

調査委託者　佐久市都市開発部区画整理課

開発事業　佐久都市計画事業岩村田北部第一土地区画整理事業に伴う道路建設工事等



第２図　佐久市都市計画事業岩村田北部第一土地区画整理事業に伴う
発掘・試掘・立ち会い調査区（１：6000）

曽根新城遺跡Ｉ地区（ＮＳＩ）（仙禄湖線）

遺　跡　名　長土呂遺跡群曽根新城遺跡Ｉ

所　在　地　佐久市大字長土呂字新城113－１、112

調査期間　平成元年10月12日～10月31日・平成２年８月17日～11月20日

調査面積　850㎡・2275㎡

調査担当者　須藤隆司

検出遺構　竪穴住居址10棟、掘立柱建物址２棟、土坑６基、溝状遺構１本

曽根新城遺跡Ⅱ地区（ＮＳⅡ）

遺　跡　名　長土呂遺跡群曽根新城遺跡Ⅱ

所　在　地　佐久市大字長土呂字下穴虫229ほか

調査期間　平成３年７月８日～８月21日

調査面積　1770㎡

調査担当者　須藤隆司

検出遺構　竪穴住居址１棟、土坑１基、溝状遺構１本

曽根新城遺跡Ⅲ地区（ＮＳⅢ）

遺　跡　名　長土呂遺跡群曽根新城遺跡Ⅲ

所　在　地　佐久市大字長土呂字新城113ほか

調査期間　平成５年９月６日～10月25日

調査面積　1000㎡

調査担当者　須藤隆司・高村博文・森泉かよ子

検出遺構　竪穴住居址４棟、掘立柱建物址１棟、土坑10基、溝状遺構１本

根新城遺跡Ⅳ地区（ＮＳⅣ）

遺　跡　名　長土呂遺跡群曽根新城遺跡Ⅳ

所　在　地　佐久市大字長土呂字新城112

調査期間　平成４年12月21日・22日

調査面積　220㎡

調査担当者　林　幸彦

検出遺構　掘立柱建物址２棟、ピット

曽根新城遺跡Ⅵ地区（ＮＳⅥ）

遺　跡　名　長土呂遺跡群曽根新城遺跡Ⅵ

所　在　地　佐久市大字長土呂字新城110・字下聖原109－１ほか

調査期間　平成５年12月２日～平成６年１月19日

調査面積　775㎡

調査担当者　森泉かよ子

検出遺構　竪穴住居址３棟、土坑３基、溝状遺構９本、ピット

上久保田向遺跡Ⅰ（ＢＫＫⅠ）（仙禄湖線）

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅰ

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向215、205

調査期間　平成１年８月24日～９月７日．平成２年８月17日～10月16日
　　平成４年４月27日～５月７日

調査面積　1080㎡・2050㎡・200㎡

調査担当者　須藤隆司・林　幸彦

検出遺構　竪穴住居址10棟、掘立柱建物址12棟、土坑１基、溝状遺構６本

上久保田向遺跡Ⅱ（ＢＫＫⅡ）

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅱ

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向200－３・219－１・227

調査期間　平成２年９月１日～10月30日・平成４年12月１日～12月11日
　　平成５年10月26日～11月５日

調査面積　400㎡・648㎡・224㎡

調査担当者　須藤隆司・森泉かよ子

検出遺構　竪穴住居址４棟、掘立柱建物址６棟、土坑１基、土壙墓３基、溝状遺構５本河川跡

上久保田向遺跡Ⅴ（ＢＫＫⅤ）

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅴ

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向203ほか

調査期間　平成３年７月１～７月17日・平成４年９月28日～12月11日

調査面積　225㎡・476㎡

調査担当者　須藤隆司・森泉かよ子

検出遺構　竪穴住居址５棟、掘立柱建物址４棟、

上久保田向遺跡Ⅵ（ＢＫＫⅥ）

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅵ

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向217ほか

調査期間　平成５年９月１日～10月30日

調査面積　444㎡

調査担当者　森泉かよ子

検出遺構　河川跡

上久保田向遺跡Ⅶ（ＢＫＫⅦ）

遺　跡　名　枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡Ⅶ

所　在　地　佐久市大字岩村田字上久保田向212－５、207－１

調査期間　平成６年５月11日～５月21日

調査面積　458㎡

調査担当者　森泉かよ子

検出遺構　竪穴住居址２棟、溝状遺構４本

西曽根遺跡Ⅱ（ＩＫＮＳⅡ）

遺　跡　名　栗毛坂遺跡群西曽根遺跡Ⅱ

所　在　地　佐久市大字岩村田字西曽根67ほか

調査期間　平成３年７月３日・７月23日

調査面積　382㎡

調査担当者　須藤隆司

検出遺構　掘立柱建物址１棟、ピット

西曽根遺跡Ⅲ（ＩＫＮＳⅢ）

遺　跡　名　栗毛坂遺跡群西曽根遺跡Ⅲ

所　在　地　佐久市大字岩村田字西曽根67

調査期間　平成５年12月２日～12月13日

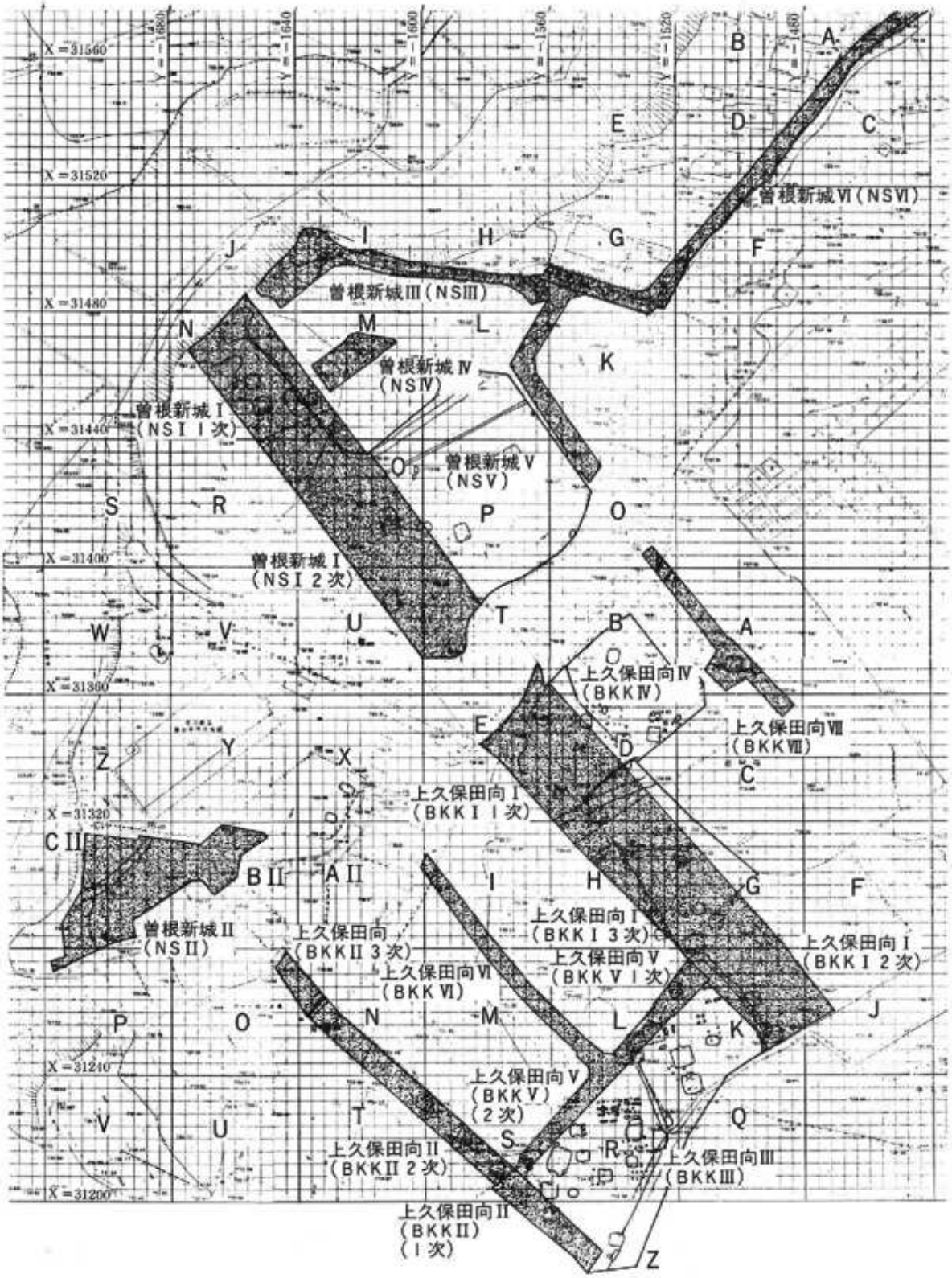
調査面積　300㎡

調査担当者　森泉かよ子

検出遺構　掘立柱建物址６棟、土坑１基、河川１本

遺構総数

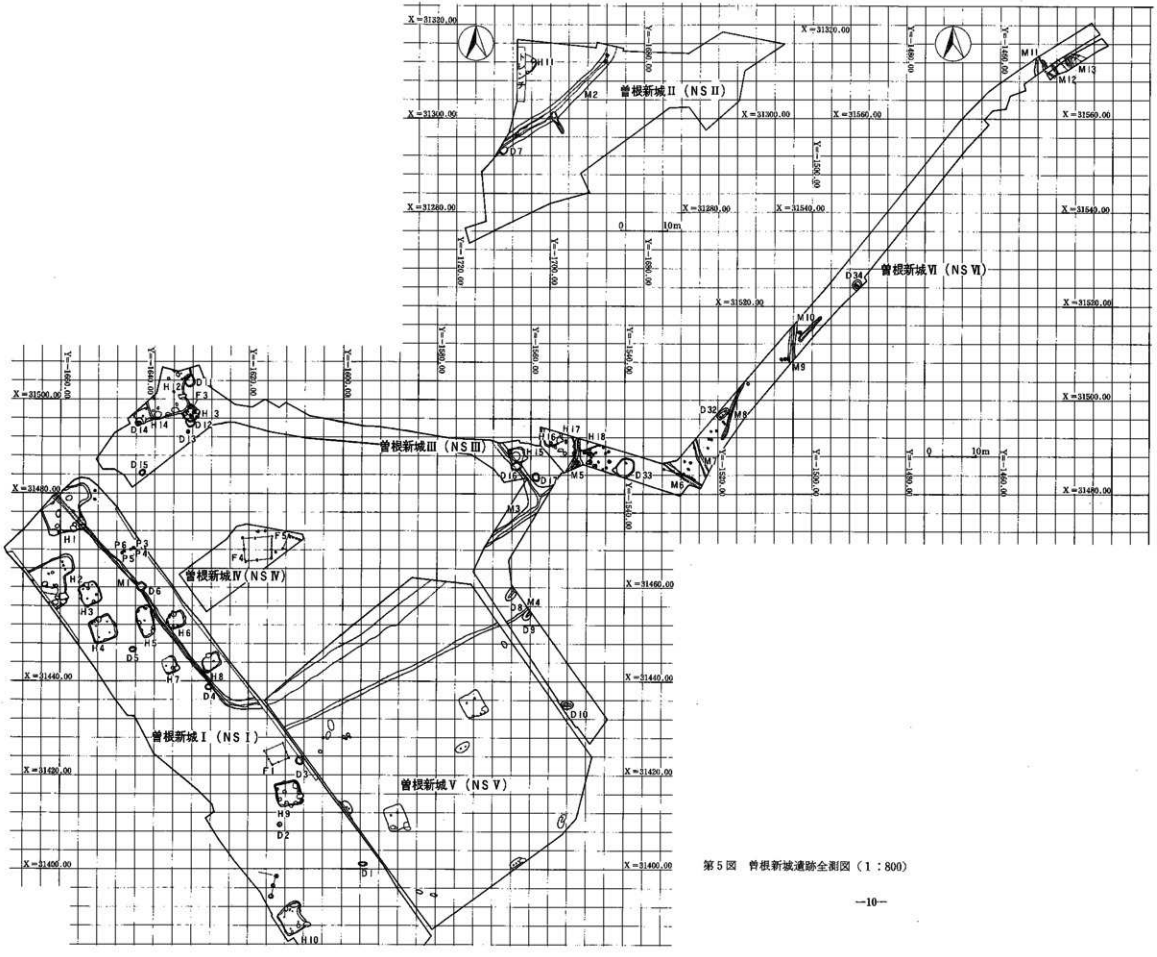
	曽根新城遺跡	上久保田向遺跡	西曽根遺跡	合計
竪穴住居址	18棟	22棟		40棟
掘立柱建物址	７棟	21棟	７棟	35棟
土　　坑	22基	５基	１基	28基
溝状遺構	12本	14本		26本
河　川　跡		１本	１本	２本



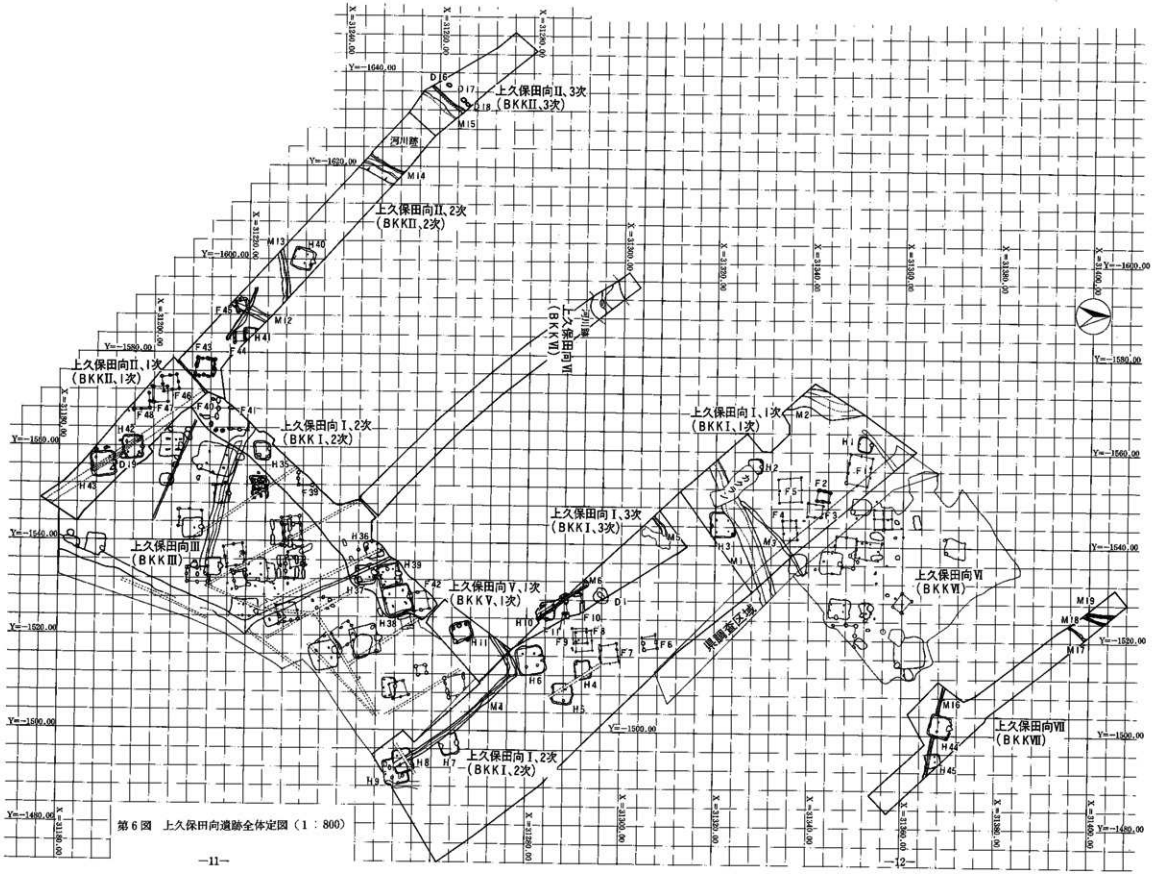
第3図　曽根新城・上久保田向遺跡発掘区設定図（1：2000）

第４図　西曽根遺跡発掘区設定図（１：2000）

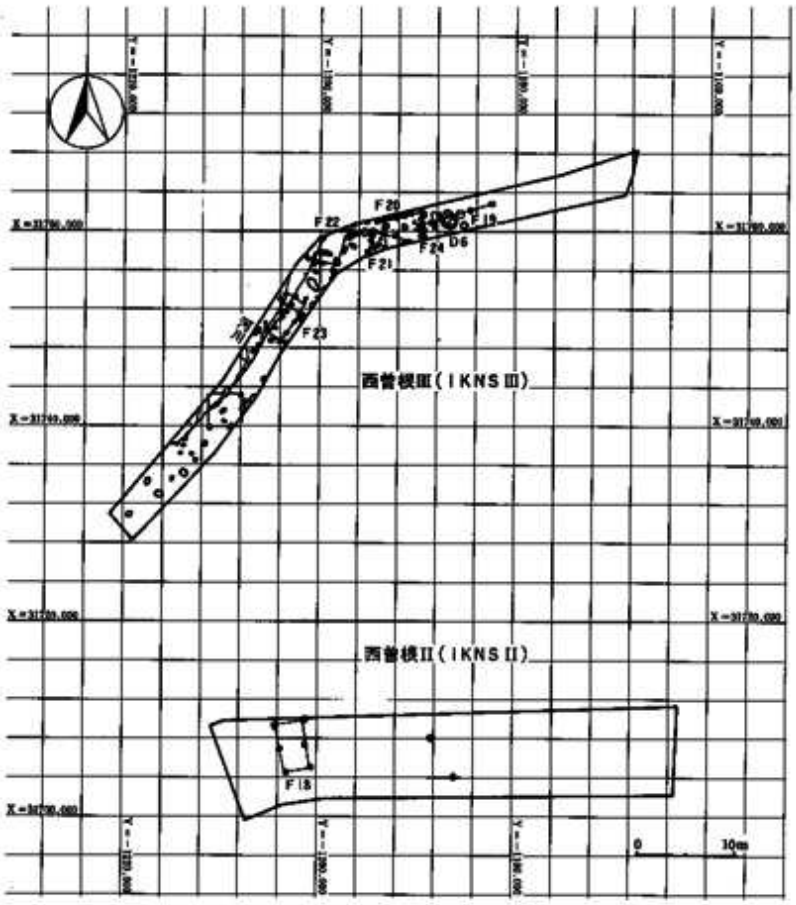
写真１　佐久市都市計画事業岩村田北部第一土地区画整理事業により建設された道路
中央を貫く道路が仙禄湖線で、仙禄湖の左には高速道路の佐久インターがある。
（北西より、平成４年12月朝日航洋社）



第５図　曽根新城遺跡全測図（１：800）



第6図　上久保田向遺跡全体定図（1：800）



第7図　西曽根遺跡全体図（1：800）

第3節　調査組織

（平成元年度）

事務局

教　育　長　大井　昭二（平成元年6月退任）

　　大井　季夫（平成元年7月就任）

教育次長　茂木多喜男

社会教育課長　北沢　馨

　　相沢　幸男（社会教育課主幹）

社会教育係長　小平　実

社会教育係　東城　公人、小林　正衛、荻原　一馬、山浦　俊彦、須藤　隆司、羽毛田卓也、

　　田村　和広、、竹原　学、掛川由香利

調査団

団　　長　白倉　盛男

副　団　長　藤沢　平治

調査担当者　須藤　隆司

調査主任　佐々木宗昭

調査補助員　浅沼ノブ江、市川　香里、堺　益子、橋詰　勝子、橋詰けさよ、橋詰　信子、

　　内藤　治伸、山崎平八郎、渡辺久美子、

協　力　者　青木　久子、飯沢つや子、磯貝　はな、井出　直代、市川　浜子、梅沢　氾子、

　　大井　文雄、柏原　松江、金井八重子、香山　優子、清野須美子、清野　姫子、

　　佐俣アエ子、小林よしみ、堀篭　因、白井おくに、高見沢幸子、中山　辰巳、

　　藤巻　辰江、丸山　澄、三石　和子、柳沢　時枝、依田　みち、

（平成2年度）

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター

教　育　長　大井　季夫

教育次長　小池　八郎

佐久市開発公社局長　須江　吉介

埋蔵文化財課長

　兼センター所長　相沢　幸男

管 理 係 長　桜井　牧子
管　　理　　係　東城　公人
埋蔵文化財係長（兼務）相沢　幸男
埋蔵文化財係　林　幸彦、高村　博文、三石　宗一、須藤　隆司、小山　岳夫、小林　眞寿、
羽毛田卓也、翠川　泰弘、竹原　学、助川　朋広

調査団

団　　長　黒岩　忠男
副 団 長　白倉　盛男、藤沢　平治
調 査 員　堺　益子
調査補助員　浅沼ノブ江、市川　香里、金森　治代、橋詰　信子、渡辺久美子
協 力 者　青木　久子、磯貝　はな、飯沢つや子、市川　浜子、梅沢　氾子、柏原　松江、
清野須美子、清野　姫子、小林　永一、小林　浜子、白井おくに、高見沢幸子、
中山　辰巳、藤巻　辰江、丸山　澄、柳沢　時枝

（平成３年度）

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化財調査センター
教　　育　　長　大井　季夫
教 育 次 長　小池　八郎
佐久市開発公社局長　須江　吉介
埋蔵文化財課長
兼センター所長　上原　正秀
管 理 係 長　桜井　牧子
埋蔵文化財係長　草間　芳行
埋蔵文化財係　林　幸彦、高村　博文、三石　宗一、須藤　隆司、小林　眞寿、羽毛田卓也、
竹原　学、
調　　査　　員　小林　幸子、花岡美津子、江原　冨子、成沢　富子、長岡喜代人

（平成４年度）

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課
教　　育　　長　大井　季夫
教 育 次 長　奥原　秀雄

課　　長　上原　正秀
管理係長　桜井　牧子
埋蔵文化財係長　草間　芳行
埋蔵文化財係　林　幸彦、高村　博文、三石　宗一、須藤　隆司、小林　眞寿、羽毛田卓也、
調査主任　佐々木宗昭、森泉かよ子

（平成5年度）

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長　大井　季夫
教育次長　奥原　秀雄
課　　長　上原　正秀
管理係長　小林　泰子
埋蔵文化財係長　草間　芳行
埋蔵文化財係　林　幸彦、高村　博文、三石　宗一、須藤　隆司、小林　眞寿、羽毛田卓也、
冨沢　一明、上原　学
調査主任　佐々木宗昭、森泉かよ子
調査副主任　堺　益子

（平成6年度）

事務局　佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長　大井　季夫
教育次長　奥原　秀雄
課　　長　戸塚　満
管理係長　谷津　恭子
管理係　田村　和広
埋蔵文化財係長　草間　芳行
埋蔵文化財係　林　幸彦、三石　宗一、須藤　隆司、小林　眞寿、羽毛田卓也、冨沢　一明、
上原　学
調査主任　佐々木宗昭、森泉かよ子
調査副主任　堺　益子

（平成４～６年度）

調　　査　　員　五十嵐勝吉、石井　美鈴、井出　愛子、井出つねじ、井上　行雄、今井みさ子、上原　幸子、遠藤しづか、大井　キセ、小田川　栄、金森　治代、木内　明美、楠沢三之助、小林　立江、堺　益子、篠原　昭子、清水佐知子、清水　六郎、関口　正、角田すづ子、角田　時、角田トミエ、角田　良夫、東城　友子、徳田　代助、並木ことみ、成沢　冨子、橋詰　勝子、橋詰けさよ、橋詰　信子、花里香代子、原　キミエ、星野　良子、堀篭　滋子、宮川百合子、村松　とみ、茂木とよ子、森泉　欽一、柳沢千賀子、山崎　直、和久井義雄、

報告書作成分担　土器実測　上原　幸子・森泉かよ子・上原　学

トレース　柳沢千賀子・上原　学（遺物）・須藤隆司（石製品）

石製品実測　須藤隆司　　図面修正　森泉かよ子・堀篭滋子

鉄製品実測　上原　学　　遺物写真　草間　芳行

土器復元　小田川　栄

第４節　調査日誌

平成元年度（1989年度）

７月25・26日　大馬久保試掘。

８月24日～９月７日　上久保田向遺跡Ⅰ発掘調査。（写真3･4）

10月12日～10月31日　曽根新城遺跡Ⅰ発掘調査（写真2）

12月～３月　室内にて整理作業。

写真２　曽根新城遺跡Ⅰ（南方より）

写真３　上久保田向遺跡Ⅰ（調査前北方より）

写真４　上久保田向遺跡Ⅰ（１次）（北方より）

平成２年度（1990年度）

７月30日　湖東線（大馬久保）試掘。（写真６・８）

８月２・３日　６－20号線（西曽根）試掘（写真７）

８月17日～11月20日

曽根新城遺跡Ⅰ（２次）・上久保田向Ⅰ（２次）発掘調査。（写真９・10）

９月５日～11月20日

６－２号線・６－３号線・６－４号線

上久保田向遺跡Ⅱ（１次）発掘調査。

湖南線（上久保田向）試掘。（写真11～13）

12月26日　湖東線（大馬久保）

26日　湖東線（中曽根）（写真14）

平成３年度（1991年度）

７月１日

６－１号線（大馬久保）試掘。遺構・遺物なし。

６－11号線（上久保田向）試掘。

写真５　上久保田向遺跡Ⅰ（１次）（南方より）

写真６　湖東線（大馬久保）（北西方より）

写真７　６－20号線（西曽根）（西方より）

写真８　湖東線（大馬久保）（南西より）

写真９　曽根新城遺跡Ⅰ地区（２次）（南東より）

写真10　上久保田向遺跡Ⅰ（２次）調査風景

写真11　6－3号線（上久保田向）（北方より）

写真12　湖南線南側（南東より）

写真13　上久保田向遺跡II地区（西より）

写真14　湖東線（中曽根）（南方より）

遺構・遺物なし。

上久保田向遺跡V地区試掘。

竪穴住居址1・溝址1検出。

6－9号線（大馬久保）試掘。遺構・遺物なし。

（写真15）

7月2日

8－1号線（大馬久保）試掘。遺構・遺物なし。

6－17号線（中曽根）試掘。遺構・遺物なし。

（写真16）

7月3日

6－21号線・湖西線（西曽根）

湖西線から掘立柱建物址1検出（西曽根遺跡II）。

湖西線（上穴虫）遺構・遺物なし。

7月4日

1号緑地（曽根新城）試掘。遺構なし。

縄文早期の土器片1あり。

写真15　6－9号線（大馬久保）東線（南方より）

写真16　6－17号線（中曽根）（西方より）

7月5日　4－1号線（曽根新城）試掘。

遺構・遺物なし。

7月9日

8－4号線(中曽根)試掘。遺構・遺物なし。(写真17)

7月8日～8月21日　曽根新城II発掘調査。(写真18)

7月8日～7月17日

上久保田向遺跡V（1次）発掘調査。(写真19)

7月22日～30日　室内にて整理作業。

7月23日　西曽根遺跡II発掘調査。(写真20)

12月19日

潮西線（上穴虫）試掘。遺構・遺物なし。

1月17日

潮西線（上穴虫、県埋文栗毛坂C区隣接地）

溝状遺構1本発掘調査。(写真21)

2月12日

上久保田向I（3次）試掘。遺構・遺物あり。

平成4年度（1992年度）

4月27日～5月7日

上久保田向遺跡I（3次)発掘調査（写真22)

9月28日～12月11日　上久保田向遺跡V発掘調査。

12月1日～12月13日

上久保田向遺跡II（2次）発掘調査。

12月14日～12月25日　室内にて整理作業。

12月21日・22日　曽根新城遺跡IV発掘調査（写真23)

写真17　8－4号線（中曽根）(東より)

写真18　曽根新城遺跡II地区

写真19　上久保田向遺跡V地区(1次)(西方より)

写真20　西曽根遺跡II地区（東方より）

写真21　潮西線（上穴虫）溝状遺構

2月9日　6－14号線（上穴虫）試掘。

溝状遺構1本検出。

平成5年度（1993年度）

4月8・9日　6－11号線（上久保田向2）

試掘。遺構・遺物なし。

7月26日～29日　曽根新城遺跡Ⅲ試掘。

7月30日～8月11日　曽根新城遺跡1試掘。（写真24）

竪穴住居址4棟、溝状遺構埋土保存。

9月6日～10月25日　曽根新城遺跡Ⅲ発掘調査。

（写真25・26）

12月2日～12月13日　西曽根遺跡Ⅲ発掘調査。（写真27）

12月8日～1月19日　曽根新城遺跡Ⅵ発掘調査。（写真28）

9月1日～10月30日　上久保田向遺跡Ⅵ発掘調査。

10月26日～11月5日

上久保田向遺跡Ⅱ（3次）発掘調査。

11月9日～11月13日　曽根新城遺跡1埋め戻し。

3月9日　潮西線・上原カーボディ、移転地試掘。

遺構・遺物なし。

写真22　上久保田向遺跡Ⅰ地区（3次）

写真23　曽根新城遺跡Ⅳ地区

写真24　曽根新城遺跡1地区試掘。

写真25　曽根新城遺跡Ⅲ地区作業風景

写真26　曽根新城遺跡Ⅲ地区作業風景

平成６年度（1994年度）

５月11日～５月21日　上久保田向遺跡Ⅶ発掘調査。

（写真29・30）

８月３日～６日　第２号公園用地試掘。（写真31・32）

溝状遺構１本（一部）・ピット発掘調査。

竪穴住居址１棟、不明遺構１埋土保存。

10月11日～３月31日

室内にて整理・報告書作成作業。

写真27　西曽根遺跡Ⅲ地区

写真28　曽根新城遺跡Ⅵ地区

写真29　上久保田向遺跡Ⅶ地区

写真30　上久保田向遺跡Ⅶ地区

写真31　第２号公園用地試掘

写真32　第２号公園用地試掘

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　地形・地質

佐久市付近の地質図を見ると、東側には第三紀の荒船火山を含む関東山地に連なる山々がある。西側の千曲川左岸は、第三紀の小諸層群の上を八ヶ岳火山岩類が覆い御牧原に連なっている。この間に広がる佐久平は、滑津川より北では第一軽石流と塚原泥流が分布している。御代田町馬瀬口から小諸市森山を結ぶ線から北では第二軽石流があらわれる。佐久平北部で特徴的な田切地形は、第一、第二軽石流の分布域に限られており、ほぼ、北東から南西の方向に刻まれている。北東方向の追分原に田切地形が見られないのは、おもに1108年の噴出による追分火砕流によって田切が埋めつくされたからである。岩村田の住吉町から長土呂にかけて、また、長土呂の西・常田の北の辺りで田切地形が消滅しているのは、ここより南は、いわゆる「塚原泥流」の分布域で第一軽石流が及んでいないからである。塚原泥流、第一軽石流、第二軽石流、追分火砕流はいずれも浅間火山の崩壊物質と噴出物であり、この順に新しくなる。

「塚原泥流」の西側を除く北・東・南側には約13,600年前噴出の第一軽石流が分布している。この時の噴火で多量の火山灰が成層圏まで吹き上げられ、上空の偏西風にのって北関東の広い範囲に板鼻黄色軽石層(YP)を堆積させた。上空まで上昇しきれずに途中から火口付近に落下した多量の火山灰と軽石は、自から発するガスとの混合物となって高速の火砕流となり佐久平を完全に埋めつくした。第一軽石流は厚いところは30メートルに達するが、これによって千曲川が堰とめられて大きな湖が出現したことは湯川と滑川の河岸で水成層として認めることができる。

第一軽石流が塚原泥流を避けた理由は次のとうりである。塚原泥流はその先端近くに小高い堆積丘を残した。その後の第一軽石流は地表の凹凸を埋め、なだらかな現在見られるような地表面を作った。長土呂地籍の北の深井戸では地下25メートルまでが第一軽石流でその下に34メートルの厚さの塚原泥流が存在する。これは塚原泥流の堆積丘の周囲を厚さ25メートルの第一軽石流が埋めて平滑化されたことを意味するのである。(1994.3、樋口和雄「藤塚古墳群・藤塚II」)

本報告地点も第一軽石流の堆積が基盤となり、上久保田向遺跡の南側の水田耕作地帯は低地となって遺構は見られない。また台地上においても浸食された谷を田切り方向とほぼ同方向に持ち現状は堆積により平地に近くなっているが黒色土を堆積している地点が見られる。

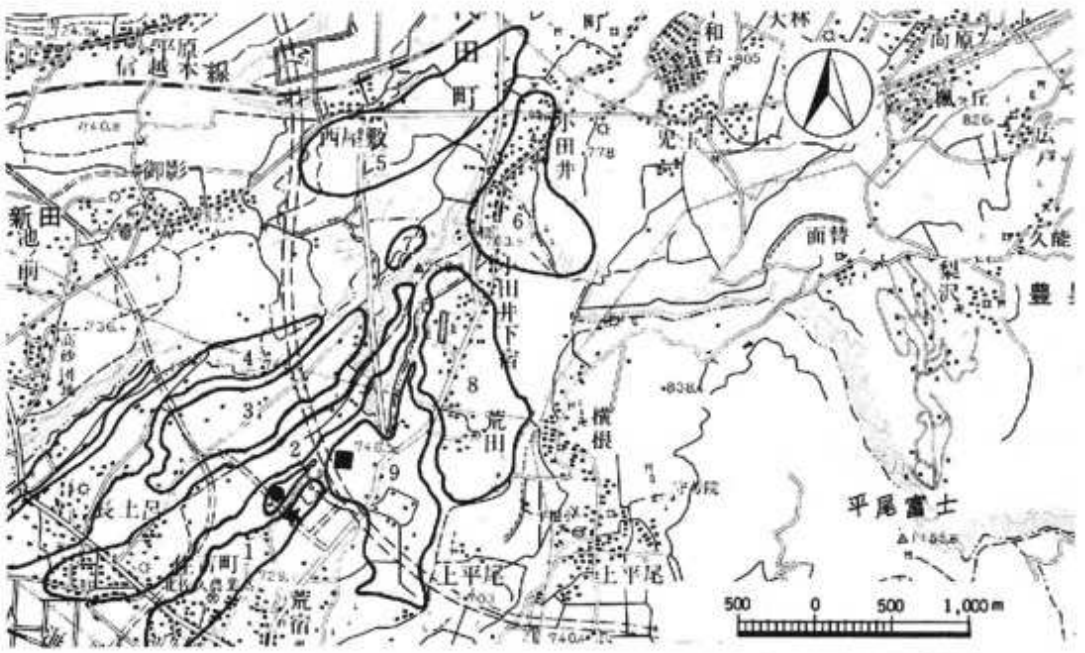
写真33　遺跡周辺の航空写真（協同測量社、1988年撮影）（北西方向を望む）

第２節　周辺遺跡

田切りにより作られた細長い台地上には多くの遺跡が分布し、佐久市でも有数の遺跡群地帯である。北側には、長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群と古墳時代から奈良・平安時代の大集落の見られる地点である。

今回調査を行った遺跡群付近は、昭和61年度から長野県埋蔵文化財センターによって行われている上信越自動車道関係の発掘調査をはじめとして、国道141号バイパスなどの道路整備事業、佐久流通業務団地造成事業、その他民間開発等に伴う大規模な発掘調査が継続して行われている地域である。

周辺遺跡群内での発掘調査を概観すると、昭和54・55・57年度に芝宮遺跡第一次・第二次・第三次の発掘調査が工場団地の造成に伴って実施され、溝状遺構・土坑等が検出されている。昭和62年度からは国道141号バイパス関係の発掘調査が開始された。本遺跡の西側に隣接する下芝宮



●曽根新城遺跡　★上久保田遺跡　■西曽根遺跡　1 枇杷坂遺跡群　2 長土呂遺跡群
3 芝宮遺跡群　4 周防畑遺跡群　5 鋳師屋遺跡群　6 中金井遺跡群　7 曽根城遺跡
8 跡坂遺跡群　9 栗毛坂遺跡群

第８図曽根新城・上久保田向・西曽根遺跡位置図及び周辺遺跡分布図
（1：50,000国土地理院地形図より）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
	541	曽根新城跡	長土呂字新城	台地					○		本調査
		上久保田向遺跡Ⅰ～Ⅴ	岩村田字上久保田向	〃			○	○	○		本調査
		西曽根遺跡	岩村田字西曽根	〃		○	○	○	○		本調査
1	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田頭他	〃		○	○	○	○		
2	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂屋し・聖石他	〃		○	○	○	○		昭和63年度から調査
3	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原・北中中原他	〃	○	○	○	○	○		昭和54年度から調査
4	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・上北原他	〃	○	○	○	○	○		
5	2	鋳師屋遺跡群	小田井字鋳師屋	〃		○	○	○	○	○	
6	12	中金井遺跡群	小田井字西浦	〃		○	○	○	○		
7	4	曽根城遺跡	小田井字曽根城	〃		○	○	○	○		
8	11	跡坂遺跡郡	横根字跡坂	〃		○	○	○	○		
9	10	栗毛坂遺跡群	岩村田字東赤座・赤座頭他	〃		○	○	○			

遺跡調査が昭和62・63年度、平成2年度に実施され、古墳時代中期から平安時代の竪穴住居址9棟、掘立柱建物址6棟などが検出されている。本遺跡群の北に展開する長土呂遺跡群においては、国道141号バイパスの延長として、昭和63年度・平成元年度に上大林遺跡、下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱの調査が行われ、弥生時代後期から平安時代の竪穴住居址60棟、掘立柱建物址18棟等が検出された。また、当遺跡の対岸に位置する上聖端遺跡、さらに上聖端遺跡から東方に広がる聖原遺跡は、昭和63年度から平成6年度まで調査が実施され、上聖端遺跡・聖原遺跡で、竪穴住居址約830棟、掘立柱建物址約700棟にのぼる遺構が検出されている。（1993.3三石宗一『南上中原・南下中原遺跡』）

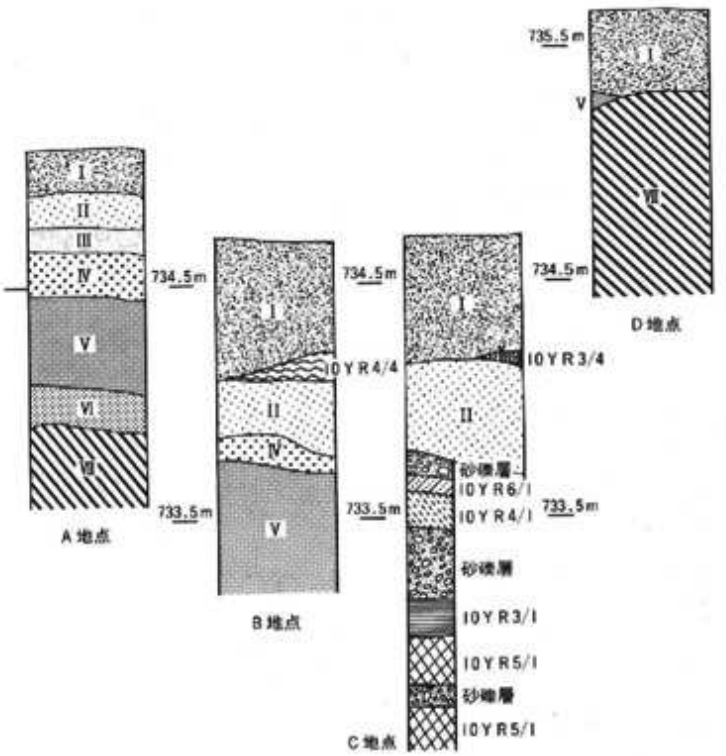
本報告の枇杷坂遺跡群上久保田向遺跡・曽根新城遺跡・栗毛坂遺跡群西曽根遺跡の三遺跡の間は田切りにより分断されているが隣接している遺跡である。田切りによって多少の差異がある。平安時代を中心とした遺構が展開されているが、ことに曽根新城遺跡は平安時代後葉の一時代に村が形成されたものと見られる。上久保田向遺跡でも平安時代前葉から末にかけての住居であり、この台地の住居としての活用は平安時代に限られるようである。

第３節　基本層序

写真34　Ａ地点基本層序

写真35　Ｂ地点基本層序

写真36　Ｃ地点基本層序



第９図　曽根新城遺跡基本層序模式図

第Ⅰ層　黒褐色土層（10YR３／２）　耕作土。５㎜大の小石を含む。砂質。

第Ⅱ層　灰黄褐色土層（10YR５／２）　シルト質の緻密質層。帯状に暗褐色土層（10YR３／３）間に入る。

第Ⅲ層　黒色土（10YR２／１）　シルト質層。

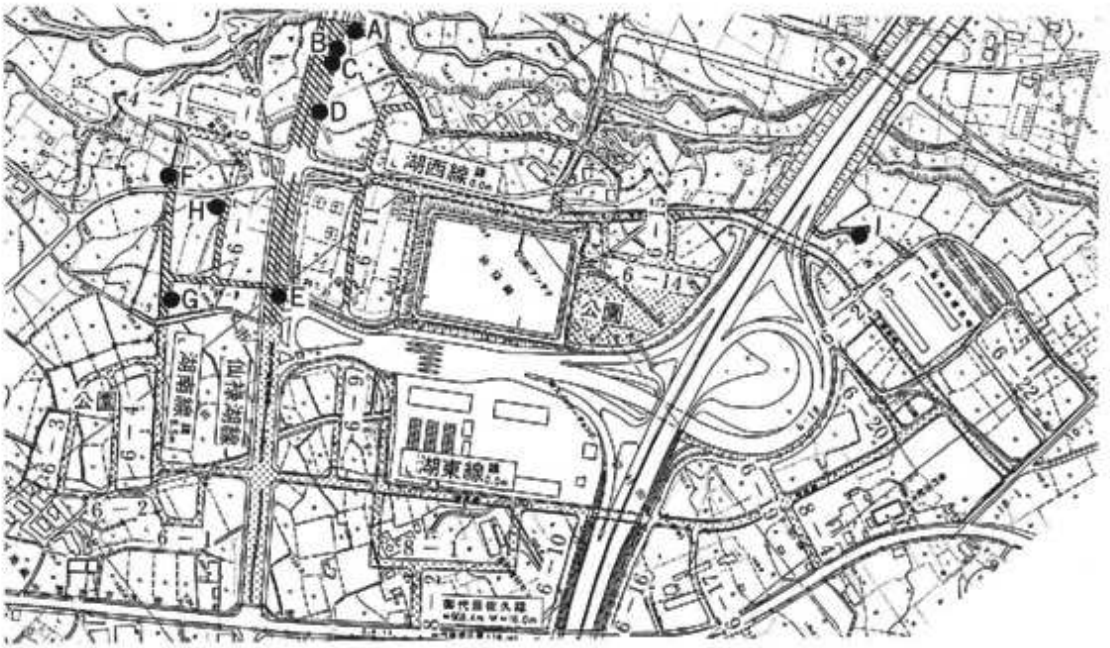
第Ⅳ層　黒褐色土（10YR３／２）　シルト質土。砂質。

第Ⅴ層　黒色土（10YR1.７／１）　２～３mm大のパミス粒含む。

第Ⅵ層　にぶい黄褐色土(10YR４／３）　ローム層。パミス含む。

第Ⅶ層　明黄褐色土層（10YR６／６）　砂質ローム。

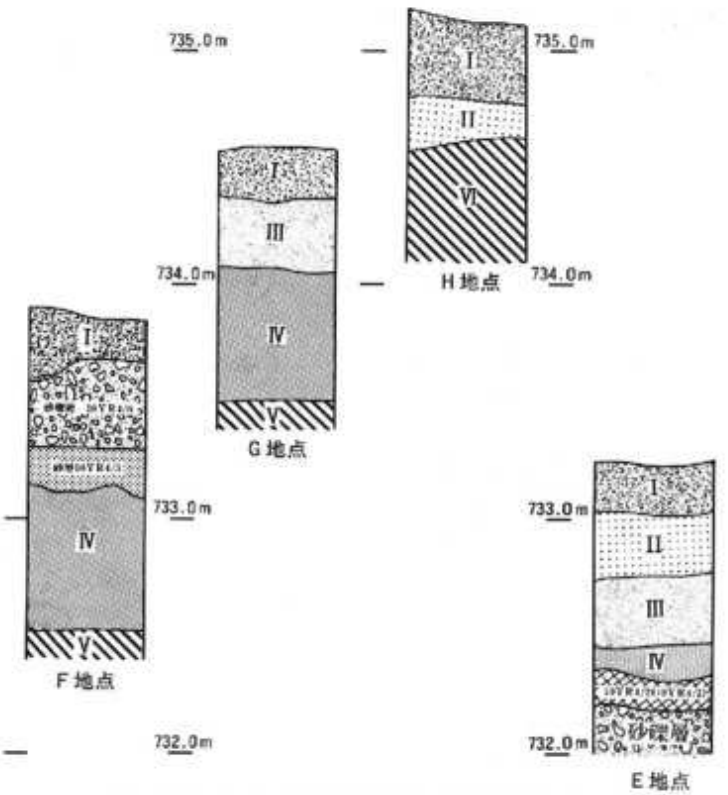
曽根新城遺跡は小さな台地で、東西450m南北120mを測る。標高737～733mを測り、北から南に傾斜している。南側は耕作土下が直接第一軽石流になるが、調査区中央から北東付近では谷が入り込み第Ⅴ層の黒色土を堆積し、上層には水成堆積を示す第Ⅱ～Ⅳ層のシルト層が見られる。平安時代の遺構は第Ⅱ層から構築されている。



第10図　基本層序作成位置図

写真37　E地点基本層序

写真38　F地点基本層序



第11図　上久保田向遺跡基本層序模式図

第Ⅰ層　黒褐色土(10YR3／1～10YR3／1)　耕作土。

第Ⅱ層　黒褐色土(10YR2／3)　5mm～1cm大のパミス含む。

第Ⅲ層　黒褐色土(10YR3／2)　5mm～3cm大のパミス含む。G地点は二次堆積。

第Ⅳ層　黒色土(10YR1.7／1)　粘性あり。パミス・ローム含む。

第Ⅴ層　にぶい黄褐色土(10YR5／3)　斬移層

第Ⅵ層　黄褐色土(10YR5／6)　第一軽石流。

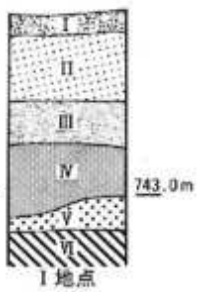
上久保田向遺跡は南側が低地に、北側は田切りにより台地になっている。標高741～734mを測り、北から南に傾斜している。台地上の中にも谷状に低い地点があり、第Ⅳ層黒色土やところによっては砂層を堆積している。E地点は南に低くなって行くところであり、黒色土・砂礫の堆積が見られる。高いところH地点では第Ⅱ層黒褐色土は斬移層、第一軽石流となる。

写真39　G地点基本層序

写真40　H地点基本層序

栗毛坂遺跡群西曽根遺跡

写真41　I地点基本層序



第12図
I地点基本層序模式図

第Ⅰ層　耕作土。

第Ⅱ層　褐灰色(10YR4／1)粘性あり。水田層。

第Ⅲ層　黒褐色土(10YR2／2)水田層。まれに5mm大のパミス含む。

第Ⅳ層　黒色土(10YR1.7／1)パミスまれに含む。

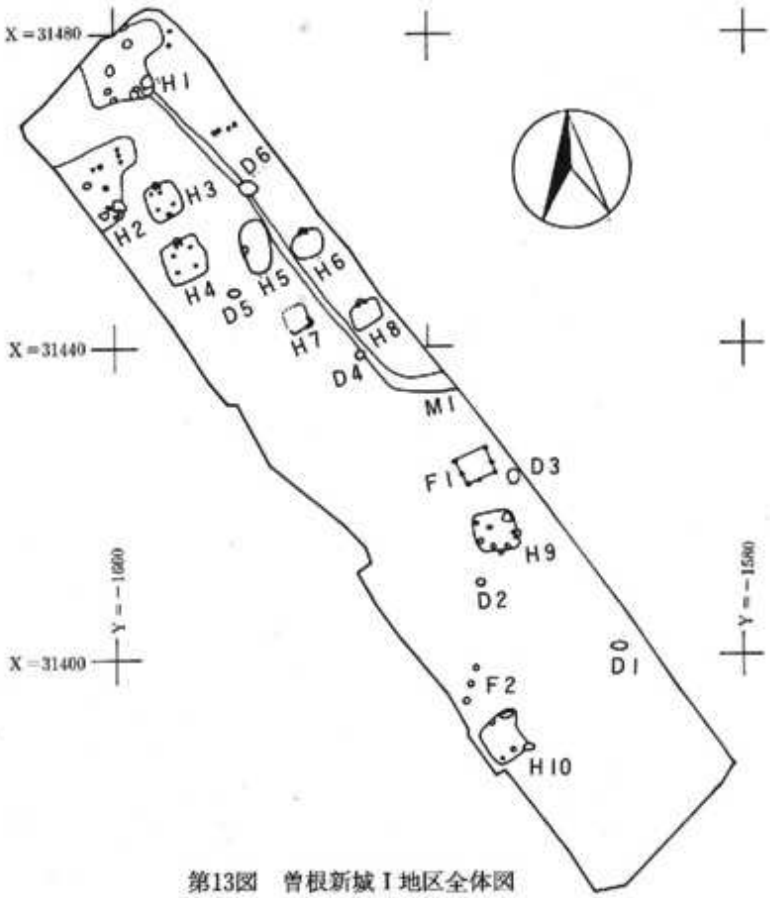
第Ⅴ層　褐色土(10YR4／4)黒色土含む。

第Ⅵ層　黄褐色土(10YR5／6)第一軽石流。

西曽根遺跡は北と東に田切りが入り込んいる。やはり第一軽石流の上に第Ⅳ層の黒色土の堆積が見られた。遺構は第Ⅳ層を切り込んで構築されている。

第Ⅲ章　曽根新城遺跡遺構と遺物

曽根新城遺跡Ⅰ地区



第13図　曽根新城Ⅰ地区全体図

写真42　曽根新城遺跡Ⅰ地区全景（北西より）仙禄湖線分

第１節　曽根新城遺跡Ｉ地区

１、竪穴住居址

１）Ｈ１号住居址

遺構

Ｉ地区北端にあり、長方形に張り出し部の付いた曲屋形態の住居址である。北西は田切りにより侵食され崩壊し、西半域は耕作により削平されている。残りの状況はあまり良くない。Ｍ１号溝状遺構を切っている。

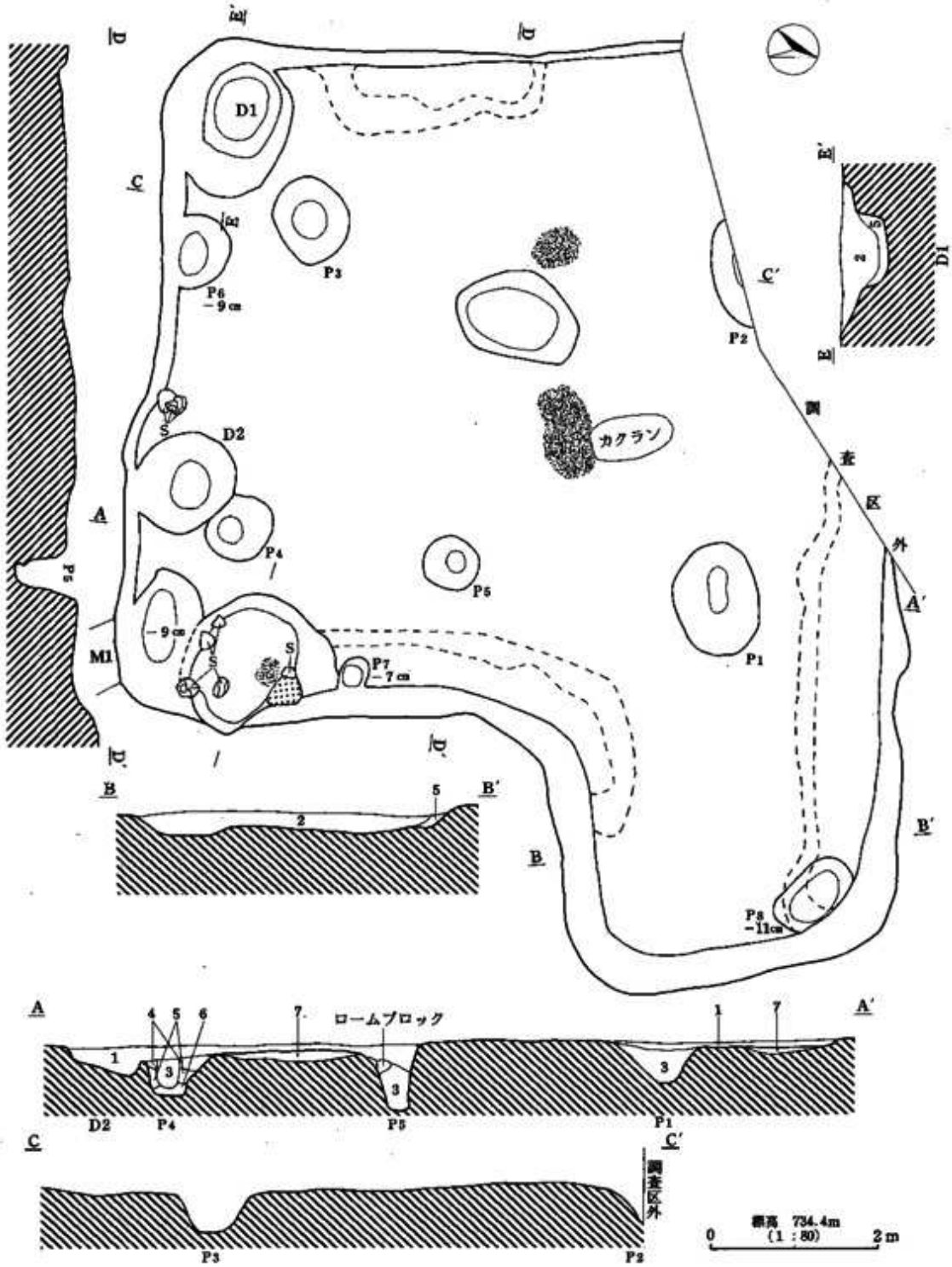
規模は南北方向に長軸をもち8.88m×7.6m を測り、長方形の北東に南北幅3.4m 東西幅3.28m の張り出しが付いている。張り出し部から西壁まで10.68m を測る。

床面は掘り方を持たず、タタキの床で踏み固められており、ことに中央部の床は締まっていた。張り出し部の床面は軟弱であった。ただ壁際は掘り込んで貼り床されている。

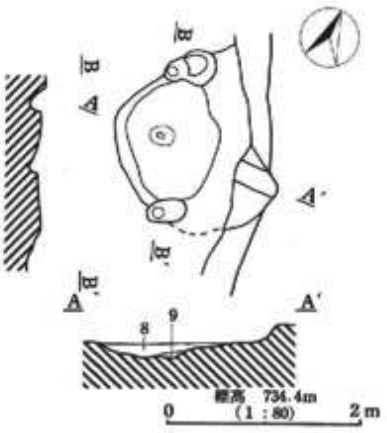
柱穴は７個ありＰ１～Ｐ５が主柱穴である。径68㎝～136㎝深さ40㎝～80㎝を測る。

土坑は南西隅と南東隅にありＤＩは径160㎝×深さ49㎝を測る円形の大きいものである。Ｄ２は径120㎝×深さ30㎝を測るものである。

写真43　Ｈ１号住居址（西より）



第14図　H１号住居址実測図



第15図　H１号住居址カマド掘り方

H１土層説明

1　黒褐色土（10YR２／３）
　小石少量、ローム粒子・パミス微量、炭化物粒子多量含む。
2　暗褐黒土（10YR３／３）
　小石少量、パミス少し、ローム粒子多量に含む。
3　黒褐色土・暗褐色土（10YR２／３・10YR３／４）
　しまりなし。
4　黒褐色土（10YR２／３）
　石少量、パミスわずかに含む。
5　暗褐色土（10YR３／４）
　ローム粒子・石含む。パミス少量含む。
6　褐色土（10YR４／４）
　ローム粒子多量、パミス・石含む。
7　褐色土（10YR４／６）
　ロームブロック含む。
8　褐色土（7.5YR４／３）
　炭化物・焼土を含む。石・パミス含む。
9　黄褐色土（10YR５／６）
　ローム主体。パミス含む。

写真44　H１号住居址カマド

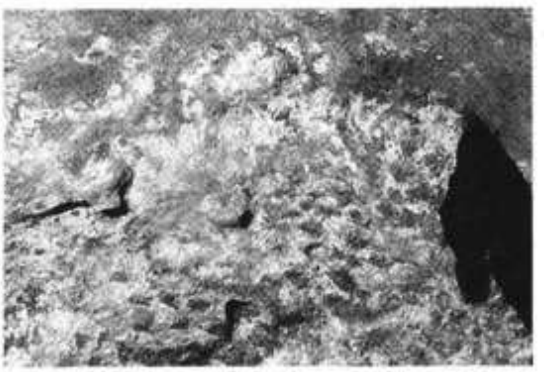


写真45　H１号住居址カマド掘り方

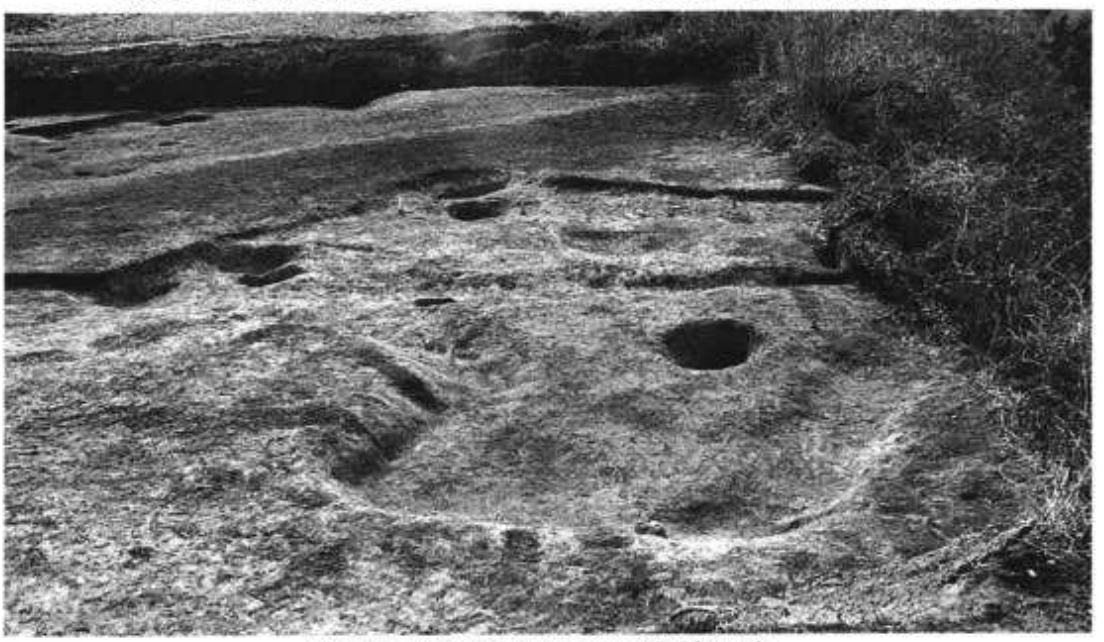
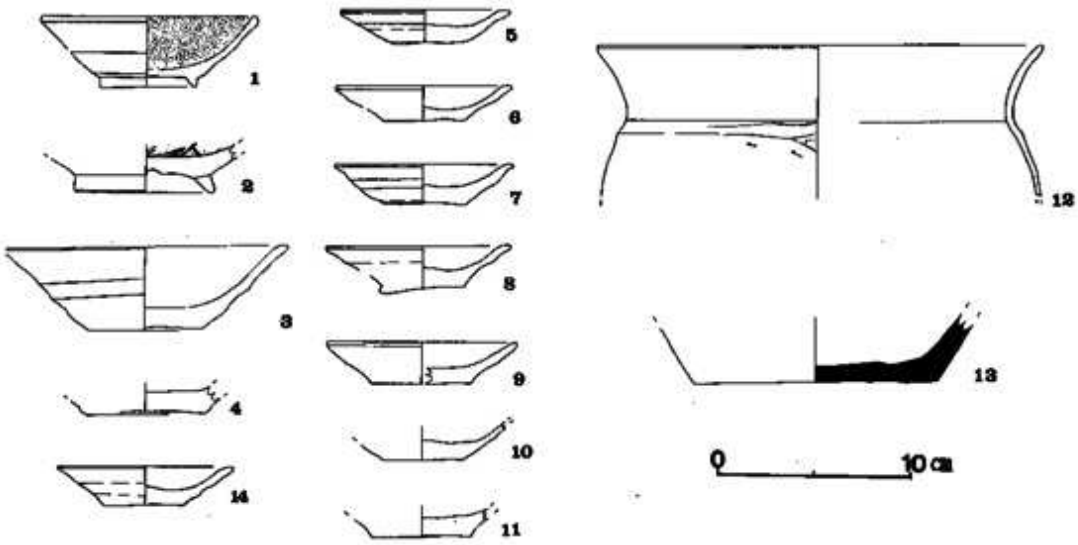


写真46　H１号住居址張り出し部（東より）



第16図　H１号住居址出土遺物実測図

覆土は黒褐色土で小石を含み炭化物粒子も多く見られた。

カマドは東壁の南端にあり、長さ176cm×幅188cmを測る。袖と火床部が残る。袖は粘土と石で構築されていた。火床部にはわずかの焼土が見られた。床下には９世紀代前半の住居址があったようである。

遺物

土器と鉄滓が出土している

鉄滓は５個で210g を測る。

土器は土師器・土師質土器・須恵器・灰釉陶器がある。

土師器には武蔵甕があり、床下から出土している。口縁部形が「く」字形で他の遺物より古いものであろう。

須恵器は杯・蓋・長頸壺・甕片がある。甕類の破片が多く、口縁が大きく外反する大甕である。実測個体は甕で四耳壺であろう。

灰釉陶器では小椀がある。灰黄色を呈し、黒色の砂粒をまれに含む。高台もわずか４mm と短い。

最も多く出土しているのは土師質の小皿・皿類で実測個体、破片も多い。２の椀は内面に雑なミガキを施し黒色処理したもので、細かい胎土である。厚く砂質の甕の破片もある。土師質の杯は口縁部が直線的な器形であり、底部は厚く小さい。土師質の小皿は薄手で浅く、口縁端部が平らになっている。

これらの遺物は12世紀代に位置付けることができる。

2）H2号住居址

遺構

HI号住居址の南にあり、Nお－4グリットにある。H2号住居址も北東に張り出しを持つ曲屋形態の竪穴住居址である。

長軸10m（南北）残存壁高18cm、張り出しの間口4.24m奥行き2.8m壁残高27cmを測る。主軸は東にずれN－60°－Eである。

残りの状態は南西側が調査区域外で東西の規模は明らかではないが、曽根新城1の試掘調査で南西隅が確認されている。耕作土との判別がつかずプラン確認は困難であった。

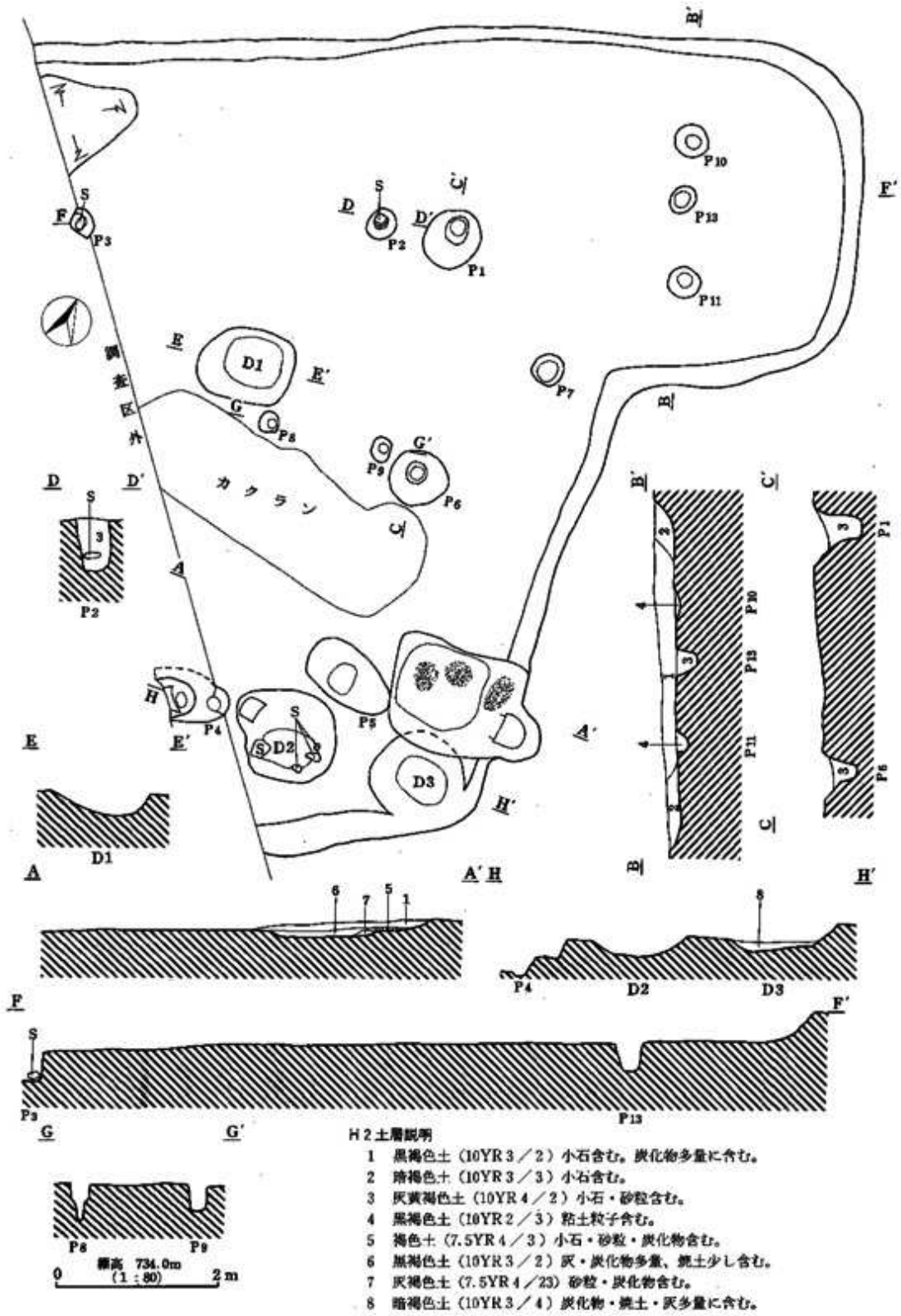
床面は生活面を捉えることはできたが、あまり締まっておらなかった。また、掘り方はなく生活面と変わらずタタキの床としていたようである。

柱穴は13個あり、P1～P6が主柱穴である。径60～64cmの円形で深さ29～60cm掘りこまれる。

土坑は住居址中央にD1があり、120cm×92cm×深さ25cmの角張った楕円形をしている。D2は南東隅床面にあり、径120cm深さ29cmの不整円形で石が中に入っていた。D3は南東の隅にあり、径120cm深さ30cmで焼土・灰・炭化物を含んでいた。

覆土は2層で、上層には黒褐色土、下層には暗褐色土があった。

写真47　H2号住居址北側（西より）



第17図　H２号住居址実測図

写真48　H２号住居址Ｐ２半裁状態

写真49　H２号住居址カマド（西より）

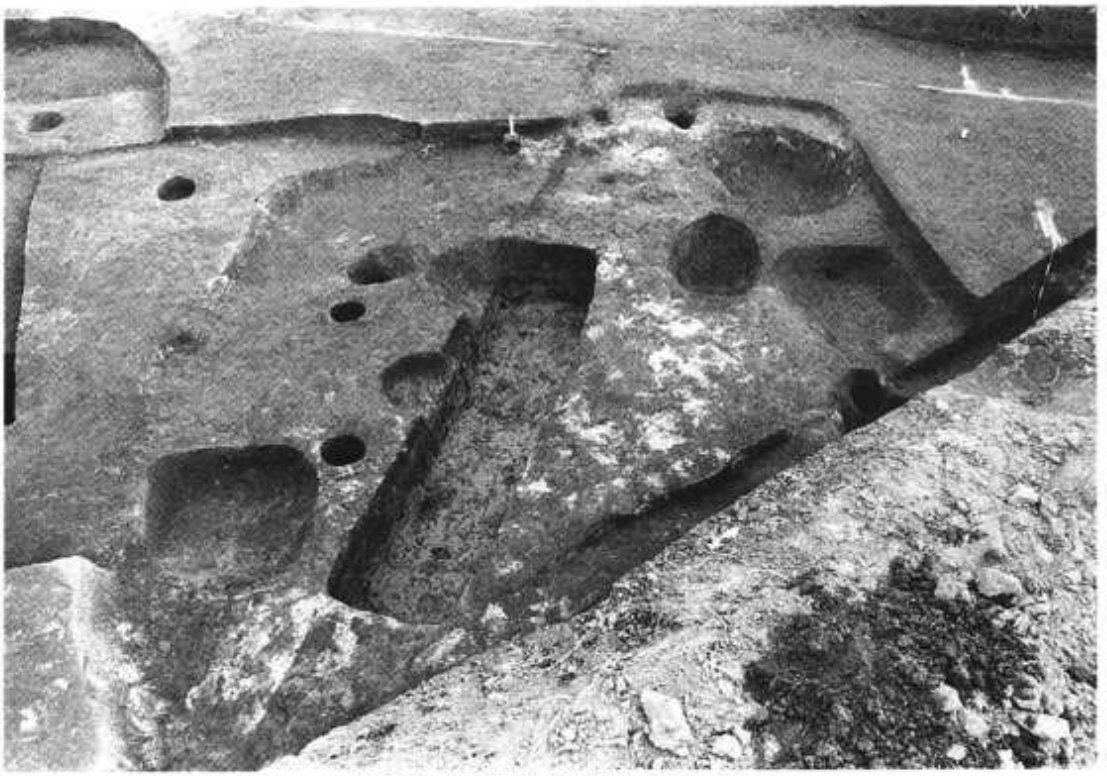
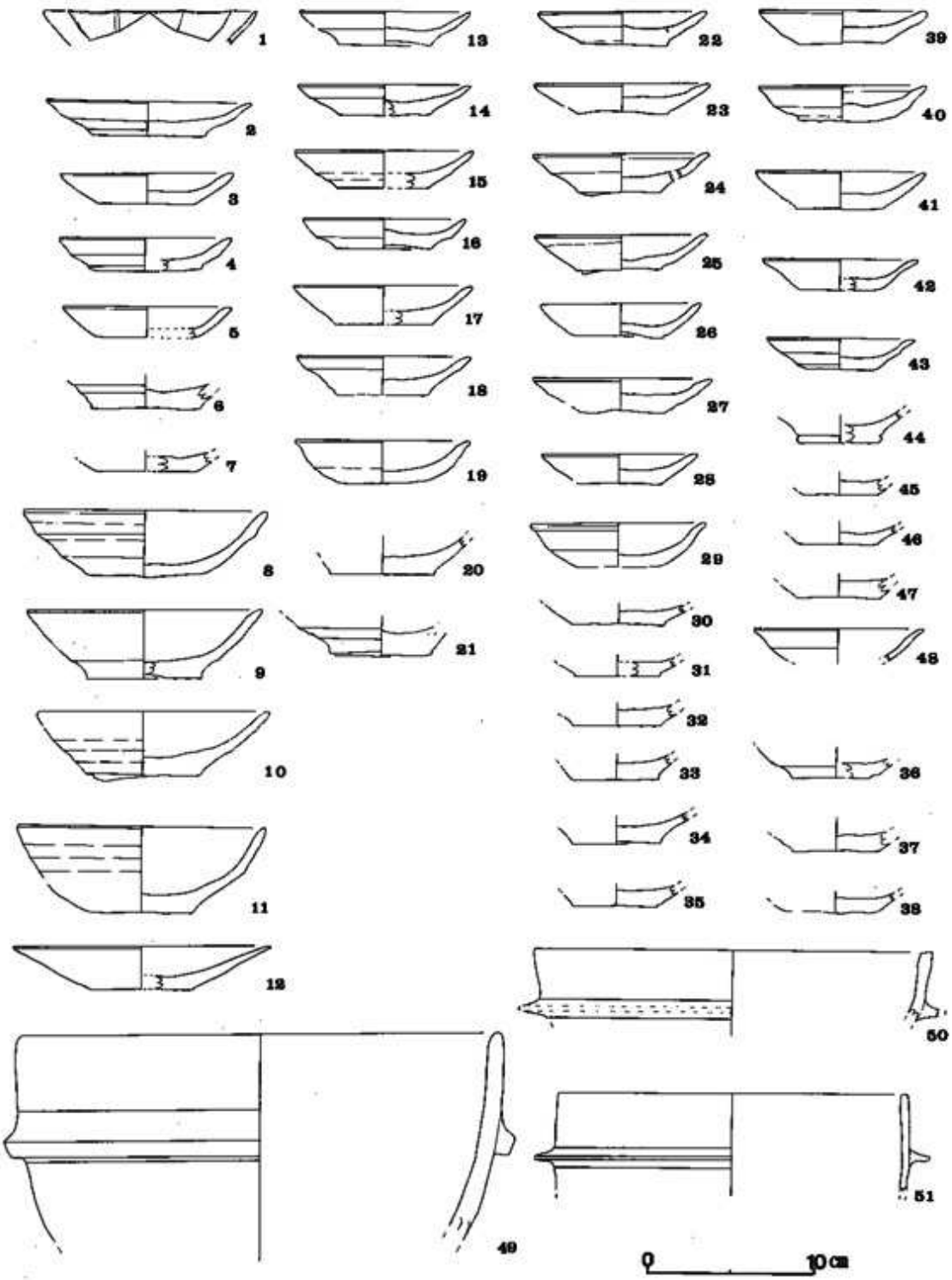


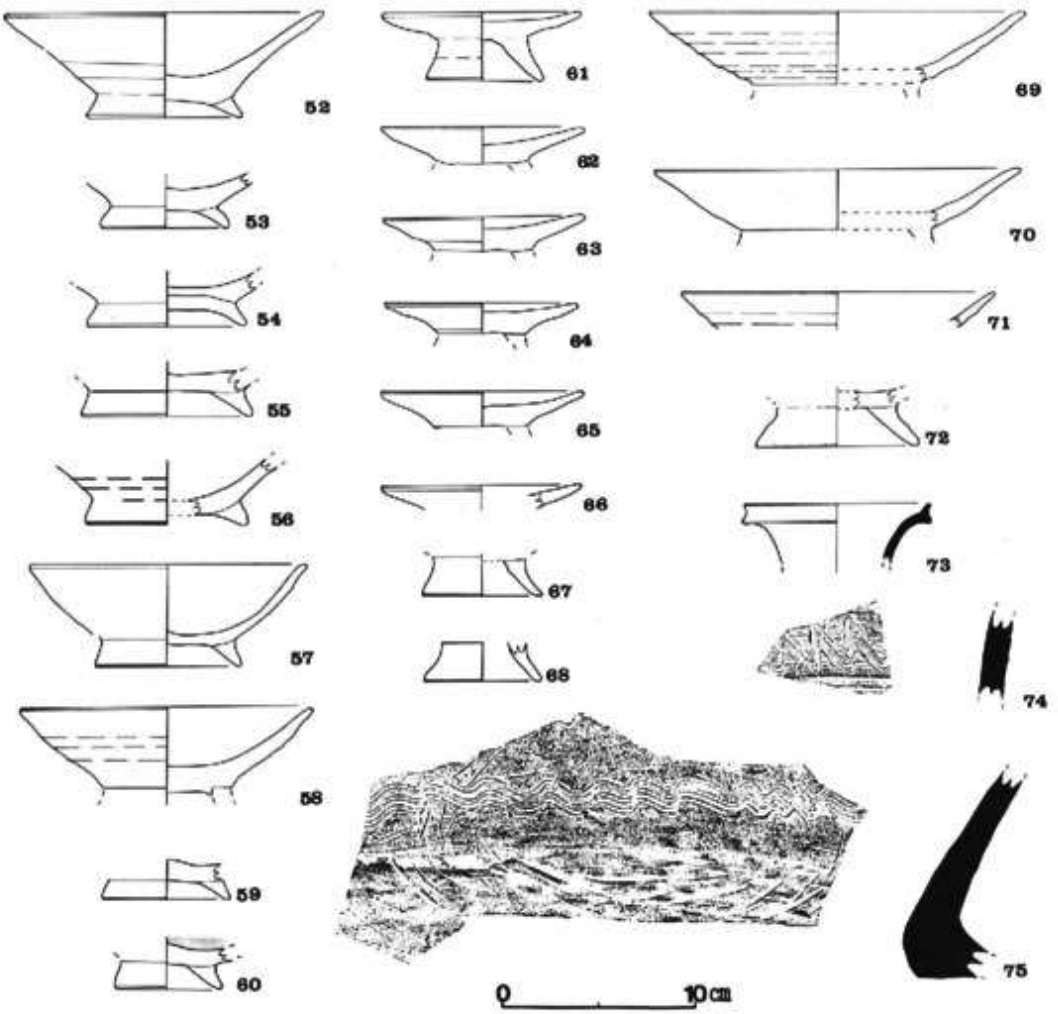
写真50　H２号住居址南側（西より）

カマドは東壁の南端にあり、長さ200cm幅140cmを測る。火床部には灰・炭化物・焼土がわずかに見られた。

遺物



第18図　H２号住居址出土遺物実測図（１）



第19図　H２号住居址出土遺物実測図（２）

多くの土器が出土し、総重量16.2Kgである。このほかに鉄滓４個80g、白磁椀小片、フイゴの羽口、石製品では軽石製の紡錘車(?)が出土している。鉄製品の用途はわからないが（鎌類の茎か）、角の細い棒状のものが出土している。

土器は土師質小皿・杯・皿・椀・高台の付く皿・羽釜が実測され、破片では厚手の甕の破片等もある。須恵器は杯片・杯蓋片・長頸壺・甕破片が見られたが少量である。

小皿が48個体も実測され、底径が同じ5.0cmを測るものが12個体あり、小皿の製法が底部を柱状にして口縁部の粘土を付け、柱状部を回転糸切りした底部柱状技法によるものと思われる。

土器の構成は、皿・杯・小皿が主体を占め、煮沸具は、羽釜と厚手の甕である。白磁輪花小椀は推定口径12cmを測るもので12世紀代であろう。（原　明芳氏のご教授による。）高台の付く小皿（皿Ｂと原氏が呼称。）があることから12世紀代の前半には位置づけられる。

3）H3号住居址

遺構

I地区北側Nえ－6グリットにある。残存状況は良好であった。

住居址の規模は長軸（南北）4.2m×3.8mを測り、壁残高32cmである。主軸方位は西に寄り、N－23°－Wである。

床面は踏み堅められていた。床下は中央を残して周縁部を掘り込んで貼り床している。

主柱穴は4本で間口がやや狭いが2.4mの方形に配置される。ピットは径20cm～36cm深さ37～60cmを測る。南壁下中央にP5があり、径60cm深さ36cmを測る。

写真51　H3号住居址カマド（南より）

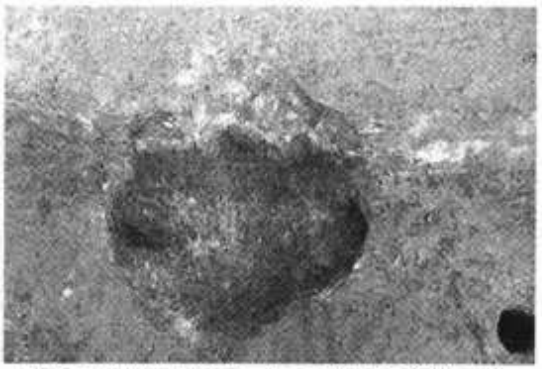
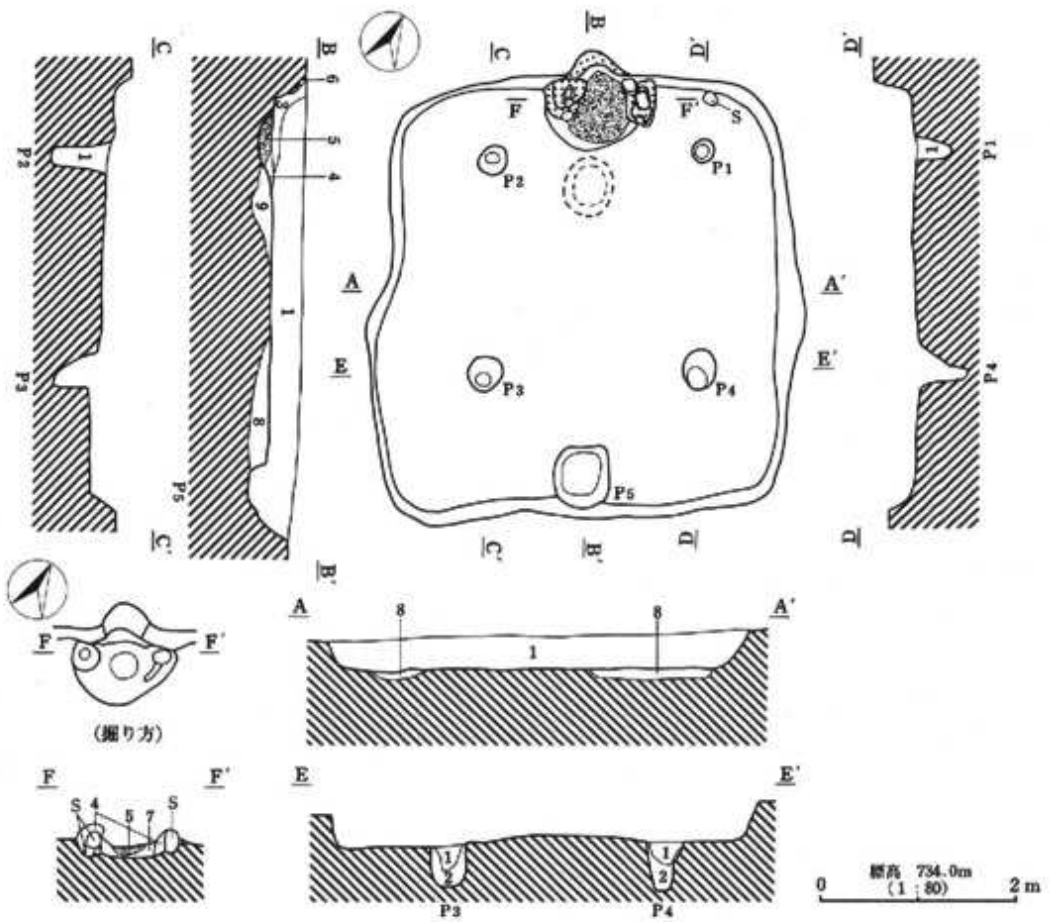


写真52　H3号住居址カマド掘り方（南より）

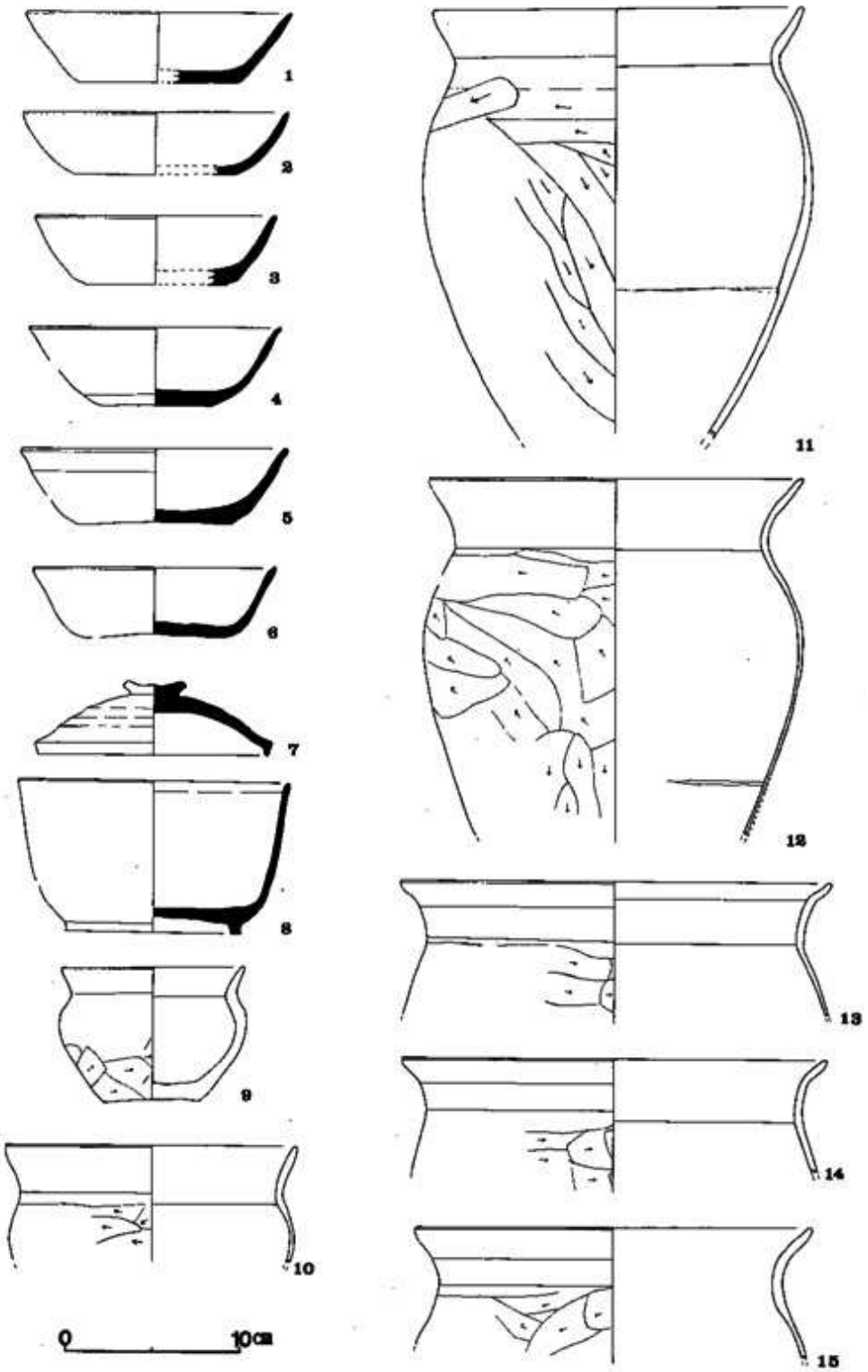
写真53　H3号住居址遺物出土状況（南より）



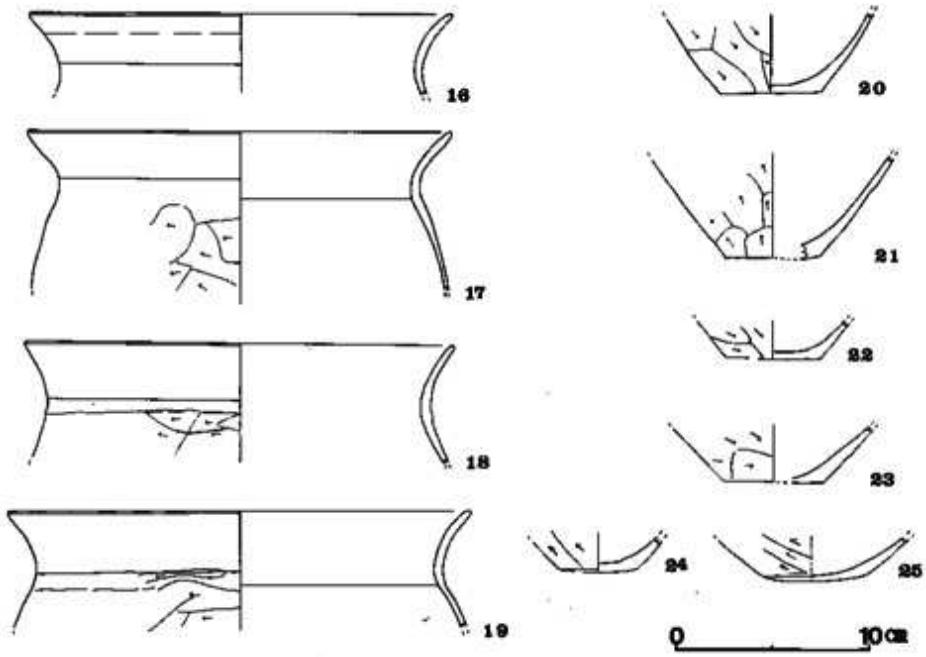
第20図　H３号住居址実測図

写真54　H３号住居址（南より）

遺物



第21図　H３号住居址出土遺物実測図（１）



第22図　H３号住居址出土遺物実測図（２）

覆土は暗褐色土で小石を含む。

カマドは北壁中央にあり、長さ100cm、幅112cmを測る。カマドは石と粘土で構築され、焼土も厚く残っていた。

遺物

土器7.2kg、鉄滓80g が出土している。またＨ４号住居址と土器が接合関係があるものが小型甕と武蔵型甕の底部あった。

土器は土師器では杯・甕・小型甕、須恵器では杯・高台付き杯・杯蓋・水瓶・長頸壺・甕がある。土師器杯は、内面ミガキ黒色処理される破片がある。杯底部が、丸底の前代のよく見られる破片もある。甕は武蔵甕が９個体実測され、口縁部断面形が「く」の字形が11・12・17･18・19と多く、13は受け口の「コ」字形態のものがある。破片では口縁部横ナデ胴部縦のヘラケズリの器肉６mm の厚手の甕があり、Ｈ４号住居址の破片と接合する。

須恵器はロクロ調整、底部回転糸切りの杯が多く、実測個体だけで６個ある。。

これらより９世紀前半に位置付けられよう。

Ｈ３土層説明

1　暗褐色土（10YR３／４）
　小石を多く含み、ローム粒・炭化物粒・砂含む。
2　黒褐色土（10YR３／２）
　石・砂粒を含む。
3　黒褐色土（7.5YR３／２）
　粘土を多量に含む。石少量含む。
4　黒褐色土（7.5YR３／１）
　粘土を多量に含む。炭化物含む。
5　にぶい褐色土（7.5YR５／４）
　焼土。
6　褐色土（10YR４／４）
　粘土層。
7　褐色土（7.5YR４／３）
　砂粒・粘土と焼土少量含む。
8　暗褐色土（10YR３／３）
　石・黒色土・粘土ブロック含む。貼り床。
9　黒褐色土（10YR３／２）
　黒色土・ロームブロックを含む。貼り床。

4）H4号住居址

遺構

I区北側Nう－8グリットにある。残存状況は良好である。

大きさは4.88m×4.8mを測り、方形である。壁残高は64cmを測る。主軸は西よりのN－22°－Wを測る。

床面はよく締まり堅かった。床下は粘土ブロック・砂の混合層で貼り床し、四隅がことに掘り込まれている。

柱穴は8個あり、主柱穴はP1～P4で柱痕が残っており、径24cmを測る。掘り方では長径64～84cm×短径40～64cm×深さ37～52cmを測る。2.4mの方形に配される。他は南壁下中央、カマド左脇にある。P6は灰落しピットであろう。

写真55　H4号住居址カマド（南より）

写真56　H4号住居址カマド掘り方（南より）

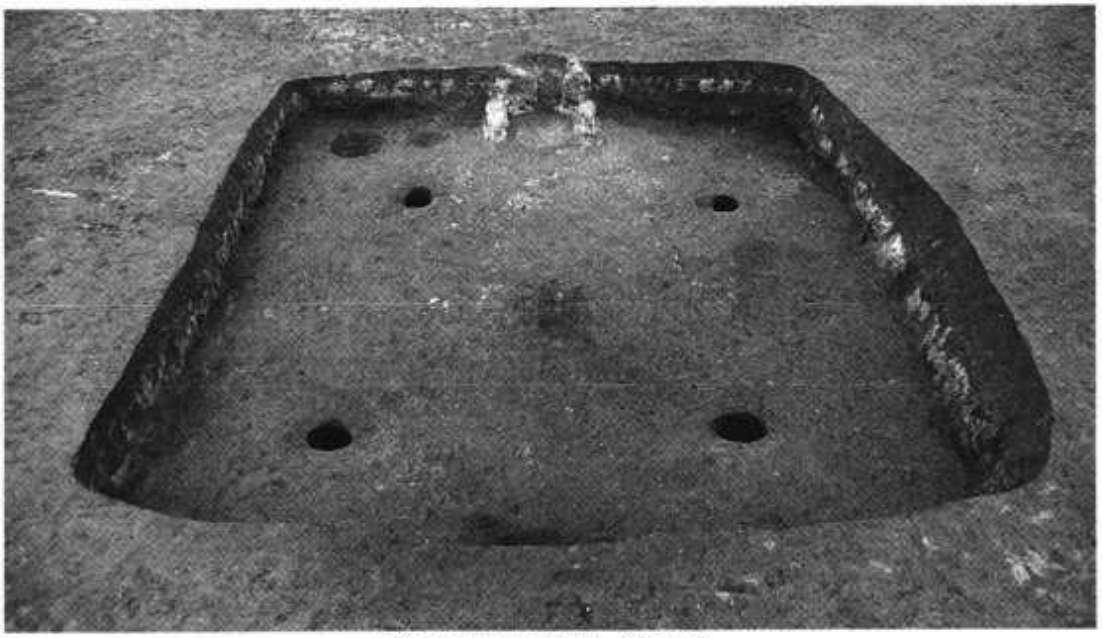
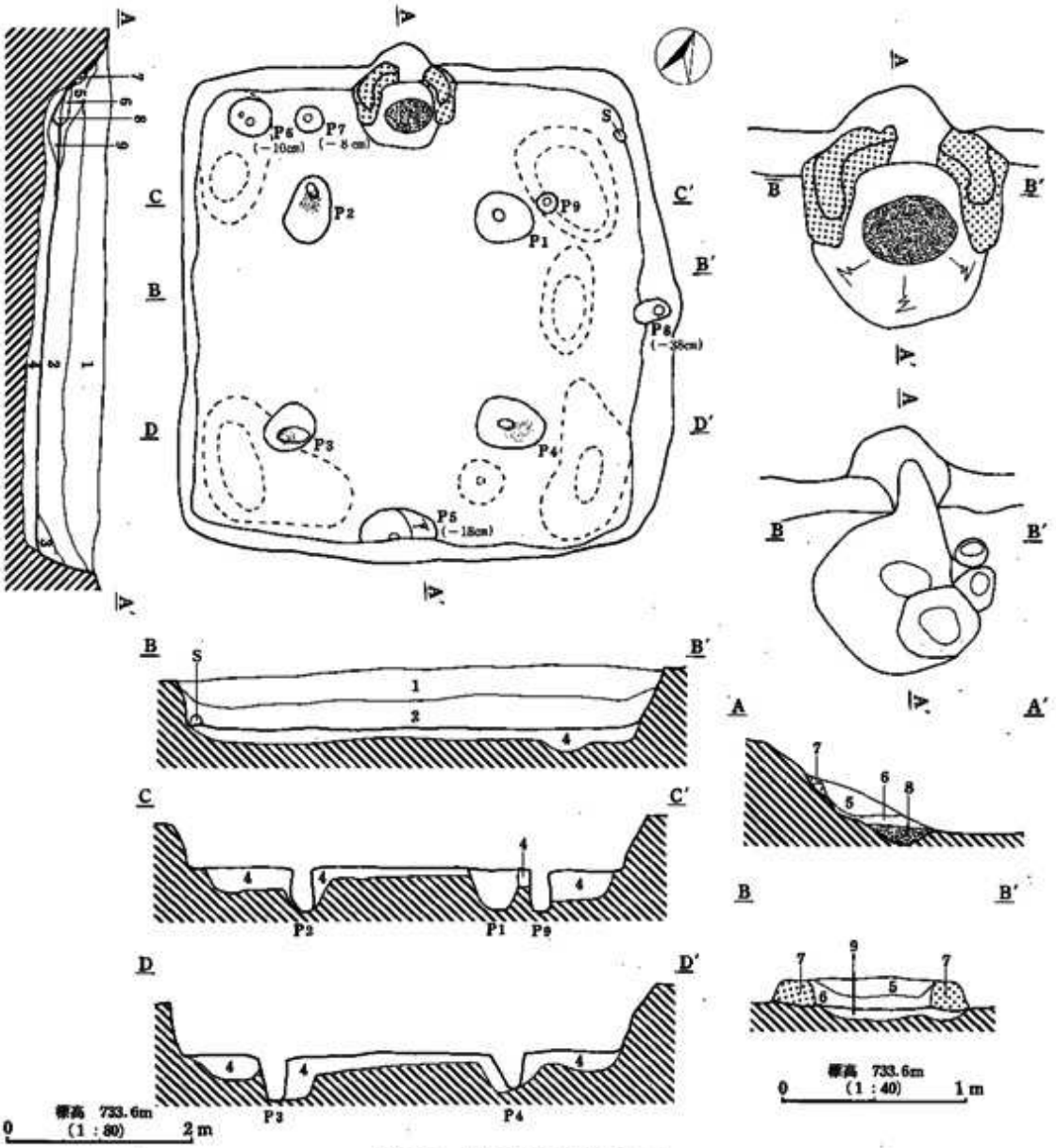


写真57　H4号住居址（南より）



第23図　H４号住居址実測図

H４土層説明

1　暗褐色土（10YR３／３）
　砂粒・粘土粒多く含む。
2　黒褐色土（10YR２／３）
　砂粒・粘土粒を多量に含む。
3　黒褐色土（10YR２／３）
　粘土粒をことに多く含む。
4　黒褐色土（10YR３／３）
　粘土ブロック・砂層の混合土。貼り床。
5　浅黄色土（10YR８／３）
　粘土層（カマド天井崩壊層）
6　褐色土（10YR４／４）
　粘土・焼土・炭化物・灰含む。
7　浅橙色土（10YR８／３）
　粘土。
8　明赤褐色土（５YR５／８）
　焼けた火床部。
9　褐色土（10YR４／６）
　ローム粒子含む。

覆土は暗褐色土、黒褐色土で砂粒、粘土を含んでいる。

カマドは北壁中央にあり長さ132cm幅110cmを測り、浅橙色粘土で構築されている。灰が厚く残り、火床部もよく焼けていた。

写真58　H４号住居址（右側）とH３号住居址（左側）（西より）

写真59　H４号住居址掘り方（南より）

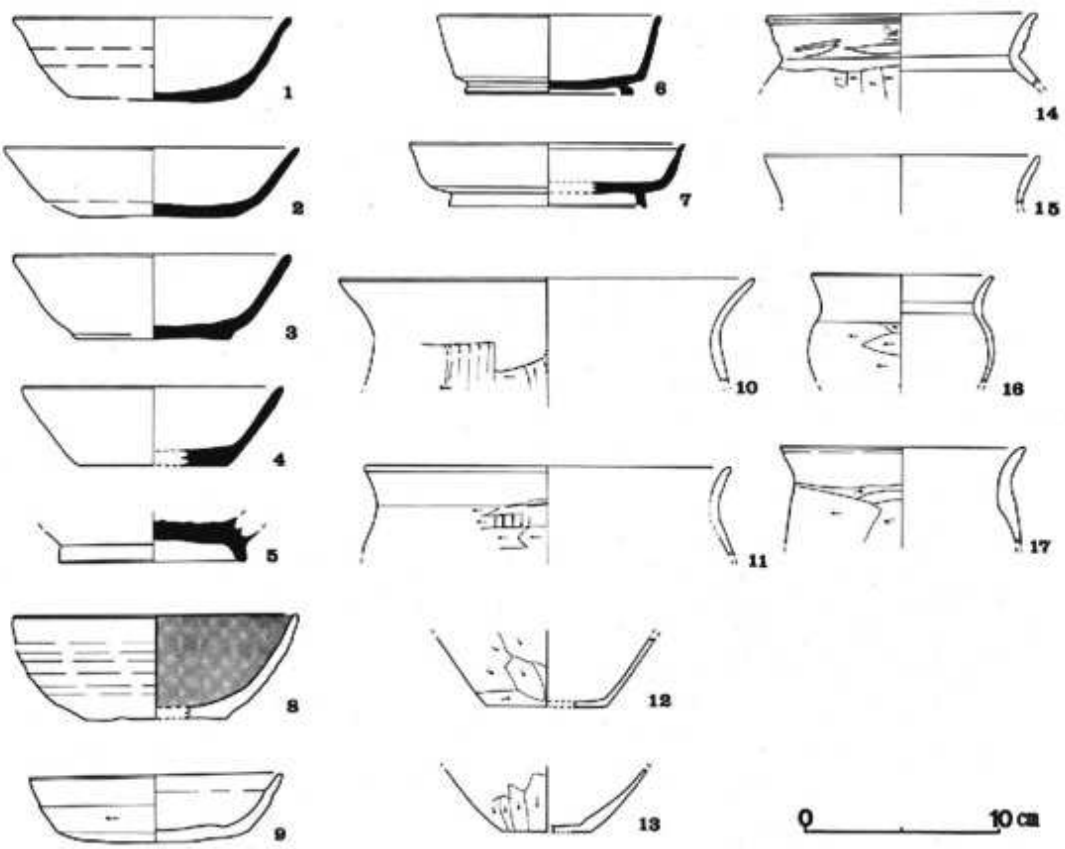
遺物

土器のみが出土している。土器は土師器杯・甕・小型甕、須恵器杯・高台付き杯・杯蓋・長頸壺・短頸壺・甕型土器がある。

土師器杯は内面ミガキ黒色処理されるもので、底部回転糸切り後一部ヘラ調整が入っている。9の杯は口縁部は横ナデ、下部は回転ヘラケズリされる、丸底気味である。この時期には見かけない器形調整方法である。土師器甕はいずれも武蔵甕である。口縁部形は「く」の字に近いが全体に外反するものである。

須恵器は杯形土器が4個体あり、1は回転糸切り後底部の周辺部に手持ちのヘラケズリが施されるが、他は底部回転糸きり調整のままである。高台の付く6・7は薄手である。須恵器甕片は格子目のタタキ調整が表になされている。

これらよりH4号住居址はH3号住居址より若干古い様相を持ち9世紀前半に位置づけられる。



第24図　H4号住居址出土遺物実測図

5）H5号住居址

遺構

I地区北側Nあ－7グリットにある。長軸6.4m×短軸4.8mの不整の楕円形に近い長方形を呈す。主軸はN－10°－Wでやや西よりである。カマドは検出されていない。壁残高は20cmを測る。

床面は中央部がやや堅い感があったが、明確な床面はわからなかった。

柱穴はP1～P7まで、壁に沿ってある。中央にも小ピットP8がある。いずれも浅いもので（P4は深さ4cm）8～14cmの深さを測るものである。

覆土は1層は暗褐色土で砂粒・粘土ブロックを含む。2層は灰白色粘土ブロックを多量に含むものである。

写真66　H5号住居址杯出土状態

写真61　H5号住居址杯出土状態

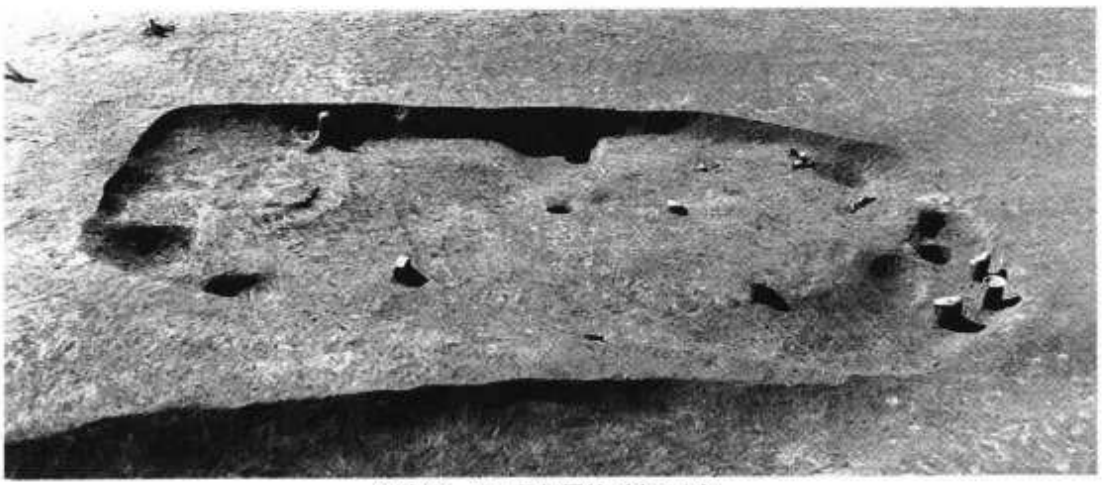
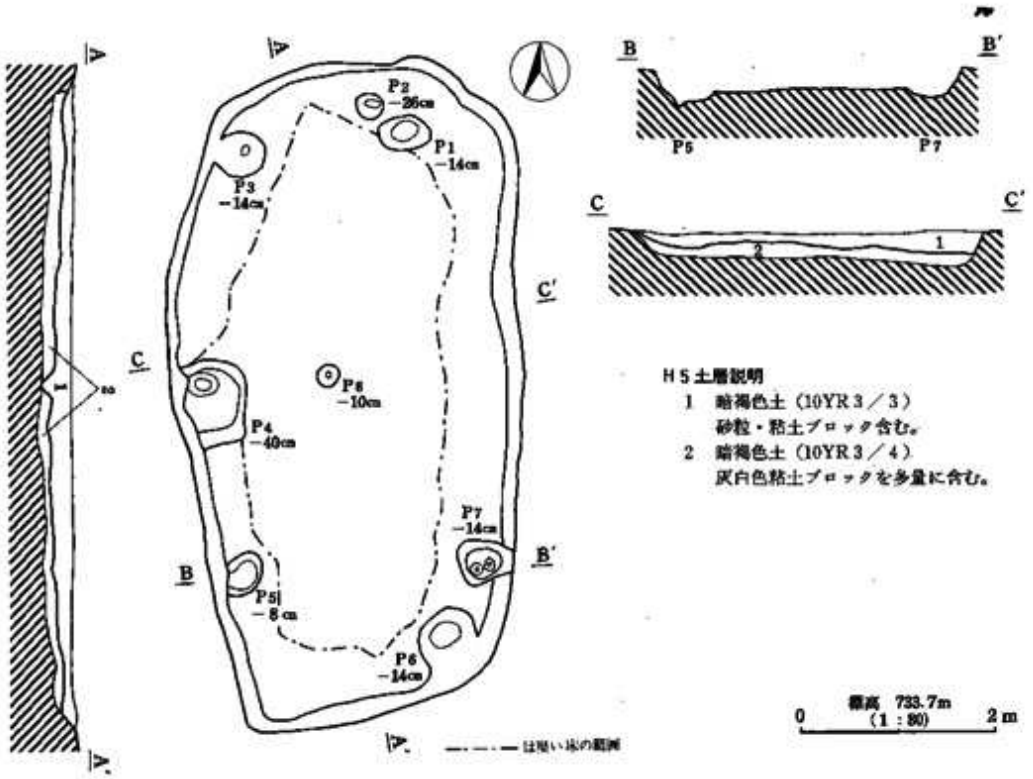


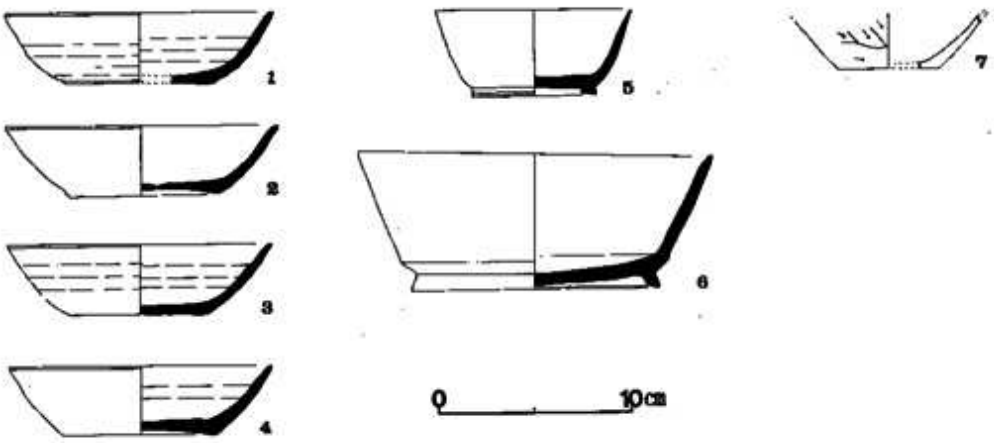
写真62　H5号住居址（東より）



第25図　H5号住居址実測図

遺物

土器2.39kgと鉄製品の刀子が出土している。土器は土師器杯・鉢（底部ヘラケズリ、内面ミガキ黒色処理）・甕・小型甕、須恵器は杯・高台付き杯・杯蓋・短頸壺・甕が出土している。土師器杯は小2片のみで内面ミガキ黒色処理、底部回転糸切りである。高台付き杯は深く端部がごく薄くなっている。甕は武蔵甕100gのみである。須恵器は杯が4個体実測され、底部回転糸切りである。時期はH3号住居址と同様9世紀前半に位置づけられる。



第26図　H5号住居址出土遺物実測図

6）H６号住居址

遺構

写真63　H６号住居址遺物出土状況（南より）

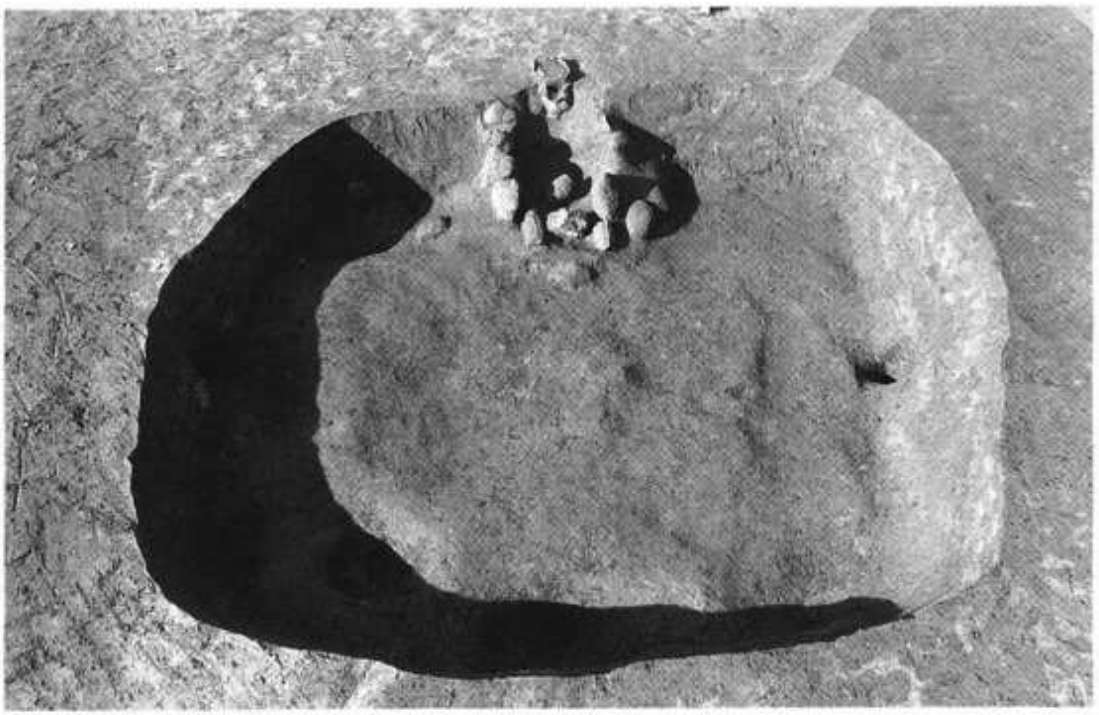
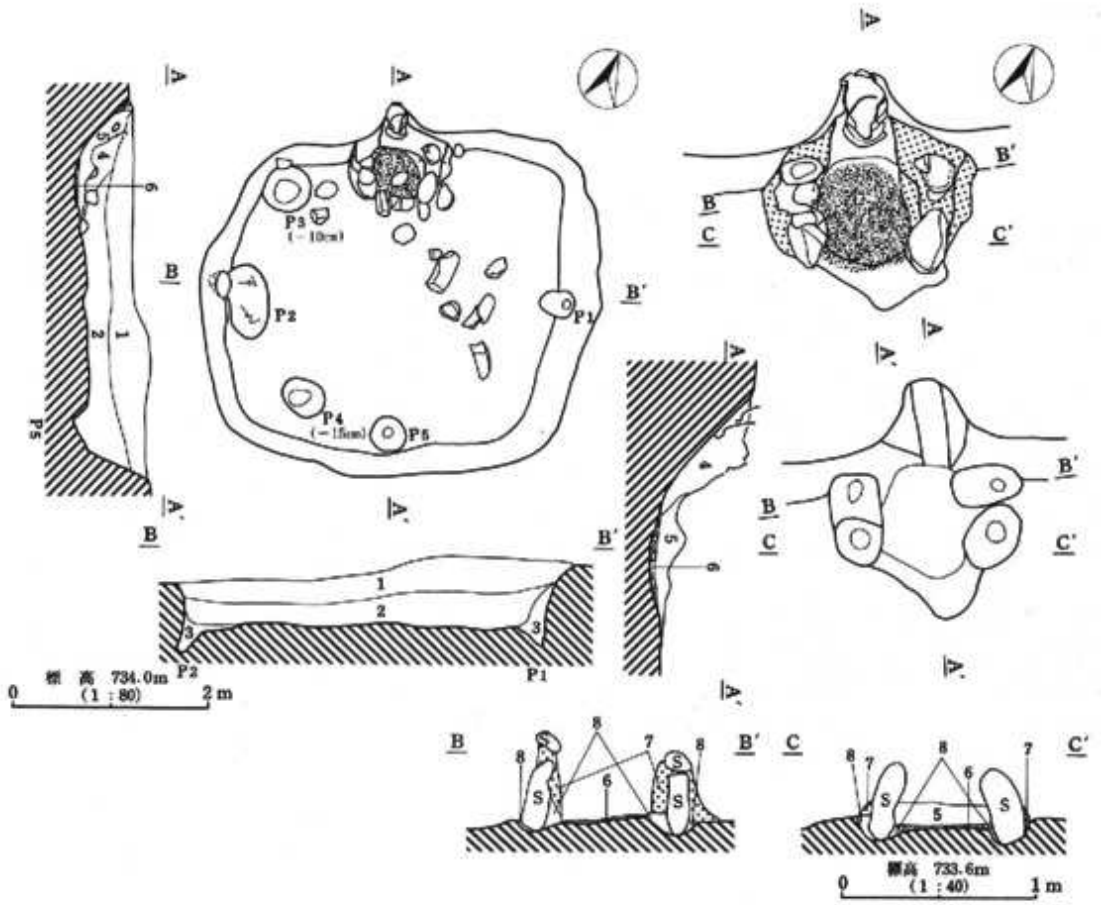


写真64　H６号住居址（南より）



第27図　H６号住居址実測図

H６土層説明

1　暗褐色土（10YR３／３）
　砂粒・粘土粒を多く含む。粘性あり。
2　暗褐色土（10YR３／３）
　砂粒・粘土粒を１層より多く含む。
3　暗褐色土（10YR３／４）
　ローム粒子を多く含む。
4　暗褐色土（10YR３／３）
　焼土・灰を多く含む。
5　黒褐色土（10YR２／３）
　粘土粒子・灰・焼土を多く含む。
6　橙色（５YR６／８）
　焼土層。
7　灰黄褐色土（10YR４／２）
　粘土層。
8　褐色土（10YR４／６）
　ローム粒子含む。

写真65　煙道の甕（南より）

写真66　煙道の甕（北より）

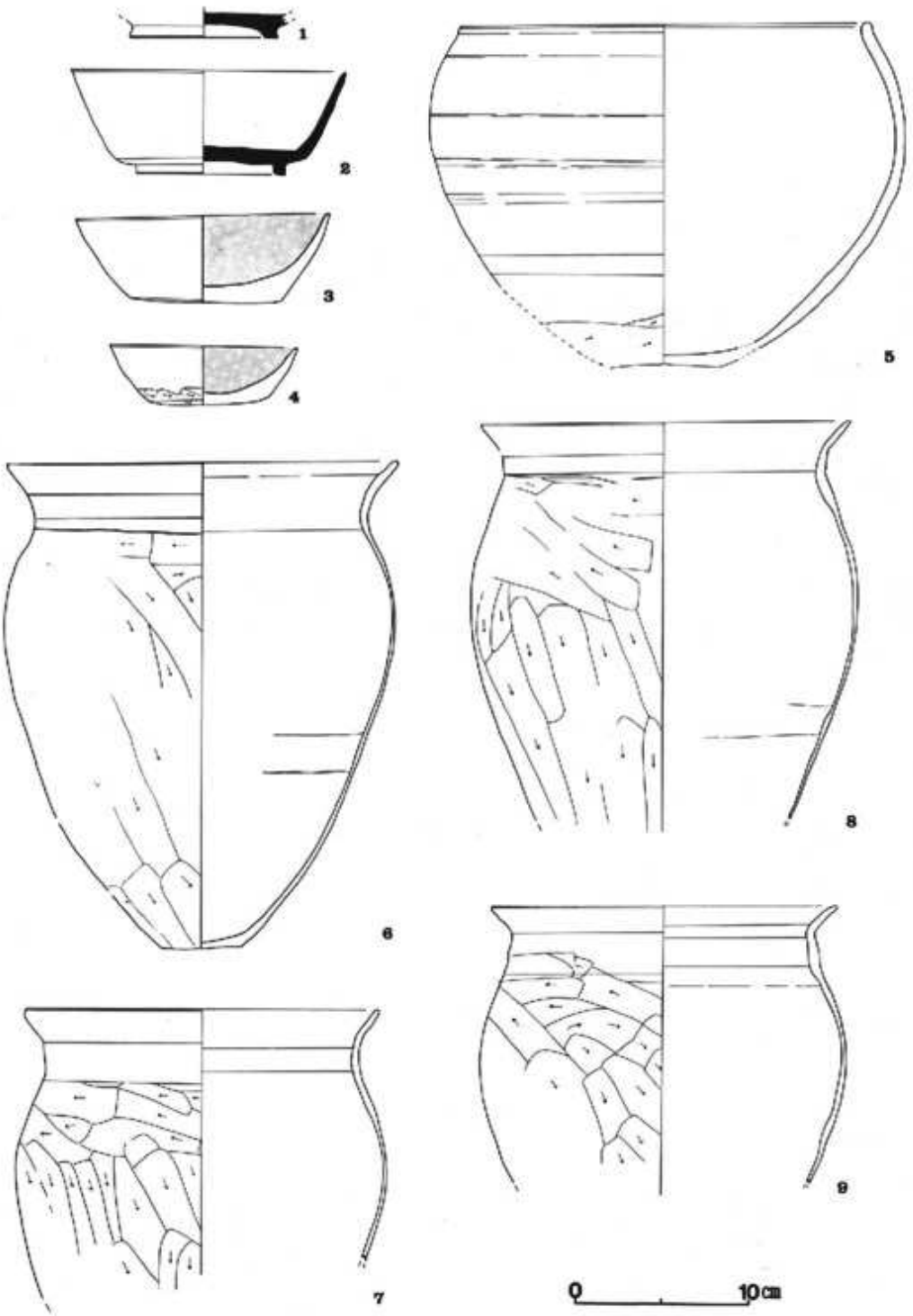
写真67　H６号住居址カマド（南より）

写真68　H６号住居址カマド（正面）

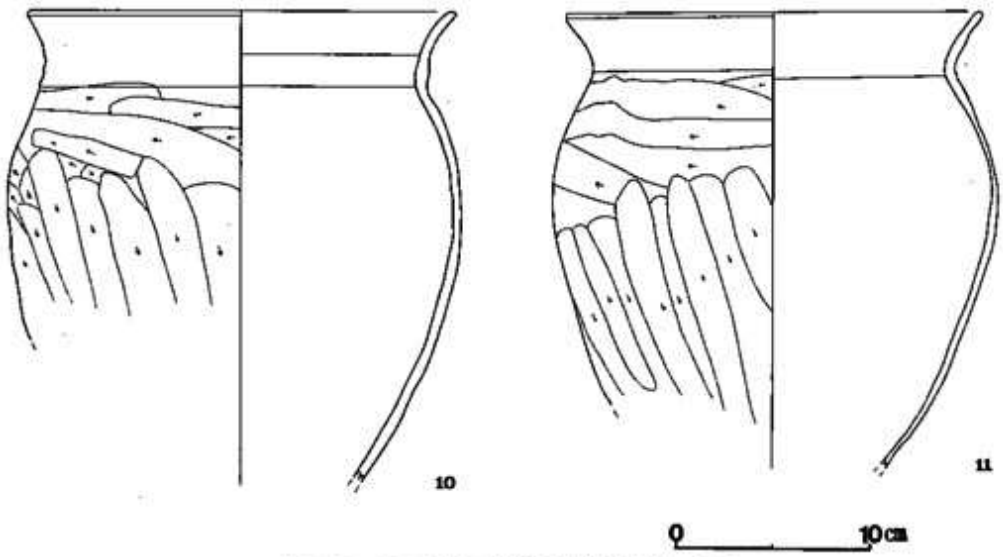
写真69　H６号住居址カマド芯材（側面）

写真70　H６号住居址カマド芯在（正面）

写真71　H６号住居址カマド掘り方



第28図　H 6 号住居址出土遺物実測図（1）



第29図　H６号住居址出土遺物実測図（２）

Ｉ区北側のＭけー７グリットにある。やや東西に長い3.36m×3.08m方形の住居址である。壁残高は60cmを測り、良好な状態で残っていた。主軸はＮ－15°－Ｗで西に傾いている。カマドは北壁中央にある。

床面は堅く締まっていた。掘り方はなくタタキの床である。柱穴はＰ１・Ｐ２が主柱穴で、東西壁中央にある。径24cm深さ16・28cmを測る

カマドは北壁中央にあって長さ120cm幅108cmを測る。煙道には武蔵甕を逆位に重ねており両袖も良好に残っていた。カマドは多くの石材を利用し、灰黄褐色粘土で構築されている。

遺物

土器4.1kg・鉄製の刀子・鉄滓20gが出土している。

土師器は杯・鉢・甕形土器がある。須恵器は杯・高台付き杯・長頸壺・短頸壺・鉢形土器がある。

土師器杯は底部が厚く、内面ミガキ黒色処理、外面底部と杯下部手持ちヘラケズリ調整される。甕は武蔵型甕で口縁断面形が「コ」字形態の７・８・９と「く」の字６・10・11とがある。10・11は煙道に利用されたものである。鉢は素縁のものである。５は鉢形を呈するが火熱を受けており、ロクロ甕である。下部横方向のヘラケズリがなされ、底部は回転糸切りされる。内面はナデ調整である。

須恵器杯は実測個体はなく、底部回転ヘラケズリの破片もある。高台付き杯は大振りで、端部が細い。杯部が全体に内湾する器形もある。鉢は尖底の托鉢形のもので、Ｈ９号住居遺址と接合関係がある。これらより時期は９世紀前半であろう。

7）H７号住居址

遺構

Ｉ区中央Ｍこ－10グリットにある。

規模は長軸（南北）3.4m×短軸2.6mを測り、長方形の形態である。主軸はＮ－23°－Ｗでカマドは南東隅にある。北西側は耕作により削平されてない。壁残高は16cmとわずかである。

床面は生活面はつかめたが、堅い床ではなかった。掘り方はない。主柱穴でＰ１は径40cm深さ24cm、Ｐ２は南壁、Ｐ３は東壁中央で径24cm深さは11.18cmを測る。南西隅にある径44cm深さ24cmの土坑があり石があった。

覆土は暗褐色土で、砂粒を含んでいる。

写真72　Ｈ７号住居址（西より）

写真73　Ｈ７号住居址（東より）